

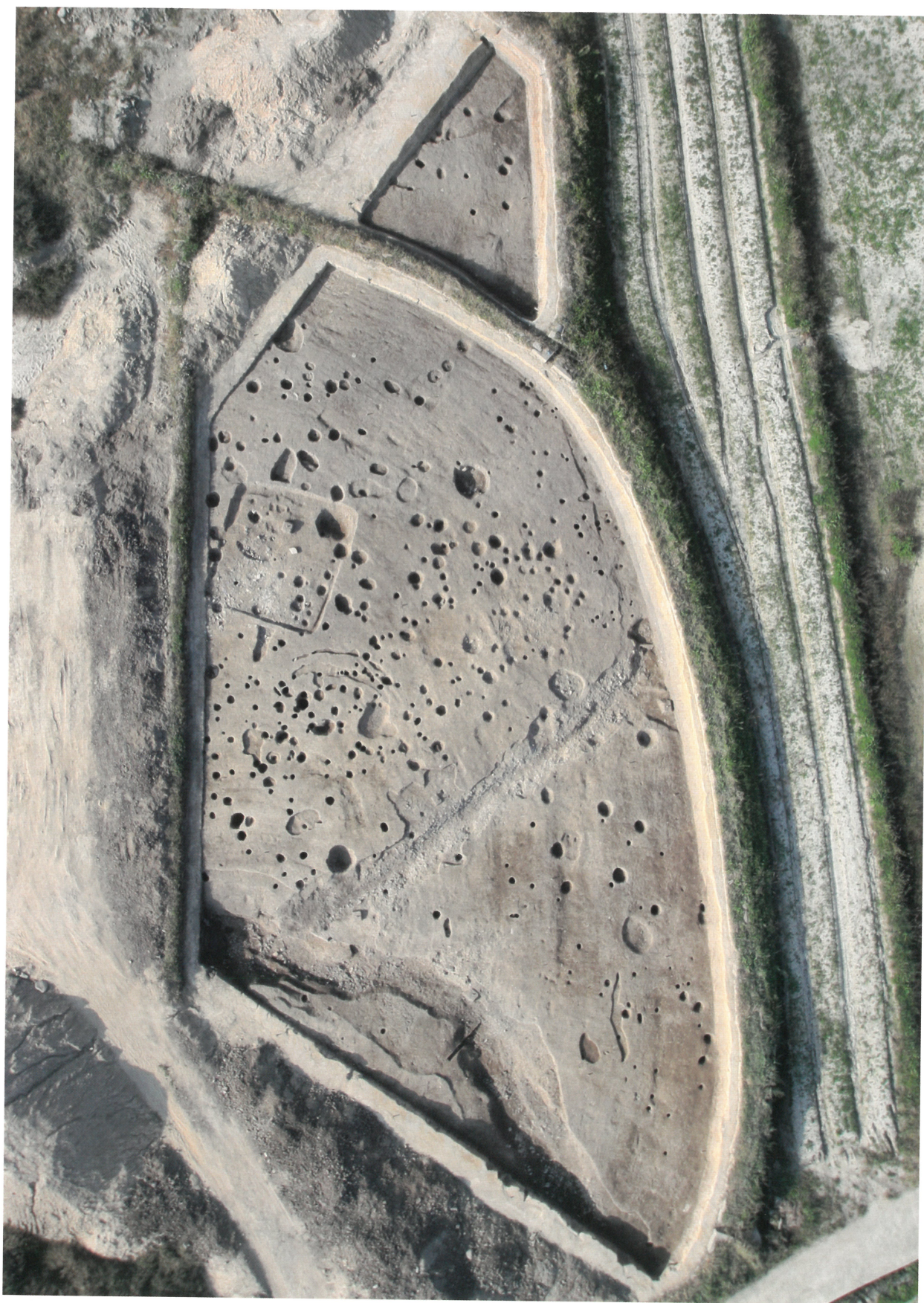
南あわじ市文化財調査報告書 第14集

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅸ

2012年度 埋蔵文化財調査

2017年3月

南あわじ市教育委員会



平石遺跡 3-1・2区 全景 (上が北北西)



平石遺跡 13区 土壙墓100 遺物出土状況(南より)



平石遺跡 13区 出土銅板・7区 出土耳環

はじめに

南あわじ市では、平成27年4月に石材加工業者の砂山から銅鐸7点が発見され、全国的にも大きな話題となりました。松帆銅鐸と名付けられたこの銅鐸は、音を鳴らすための棒（舌）がすべての銅鐸に伴うことや舌や銅鐸を吊るすための紐が見つかったことで銅鐸研究に一石を投じるたいへん貴重な資料となりました。かねてより淡路島は青銅器が多く出土する地域として研究者の間で注目されていましたが、今回の銅鐸の発見により、弥生時代の淡路島の重要性とそれを取り巻く周りの地域との関係性について、再構築が必要となってきました。

このような中、平成24年度の埋蔵文化財調査の成果概要を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報IX』として刊行する運びとなりました。今回報告されている平石遺跡は、現在確認されている遺跡の中で最も松帆銅鐸出土推定地の近くに位置する弥生時代の集落です。圃場整備事業に伴う調査のため、遺跡の全体像や銅鐸との関係性は不明であります。縄文時代前期の遺物も出土するなど、古くから生活に適した場所であったことがうかがえます。

当市での埋蔵文化財調査は圃場整備事業に伴う調査が大半を占めています。淡路島は県内でも圃場整備事業が遅れている地域で、当市では今回報告されている湊里地区と阿万本庄地区の圃場整備が完了する平成28年度末に圃場整備率が49%に達します。今後も圃場整備事業の波は留まることなく、新たに数地区で計画され、益々盛んになっております。それに伴う発掘調査によって、新たな祖先のあしあとも多く見つかかり、当市の歴史も徐々に明らかになりつつあります。

今回年報という形で不十分さもあるとは思いますが、今後もさらなる努力により当市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会
教育長 浅井 伸行

例言

1. 本書は南あわじ市教育委員会が2012（平成24）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
4. 本書の編集は的崎が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、下記の方にご協力ご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。（敬称略）
伊藤宏幸・浦上雅史・森岡秀人・森本徹

目 次

巻頭写真図版

はじめに

例言

第 1 章 埋蔵文化財事業の動向 1

第 2 章 埋蔵文化財調査の成果

第 1 節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 2

第 2 節 主な埋蔵文化財調査の成果

1 井手田遺跡（5次調査） 3

2 護国寺東遺跡（3次調査） 6

3 平石遺跡（4次調査） 8

4 南畑遺跡・戒壇寺跡 27

第1章 埋蔵文化財事業の動向

平成24年度は、分布調査1件、試掘調査1件、確認調査1件、本発掘調査2件を実施した。試掘調査・確認調査・本発掘調査の調査面積合計は3,690.7㎡となり、前年度にくらべて減少となった。

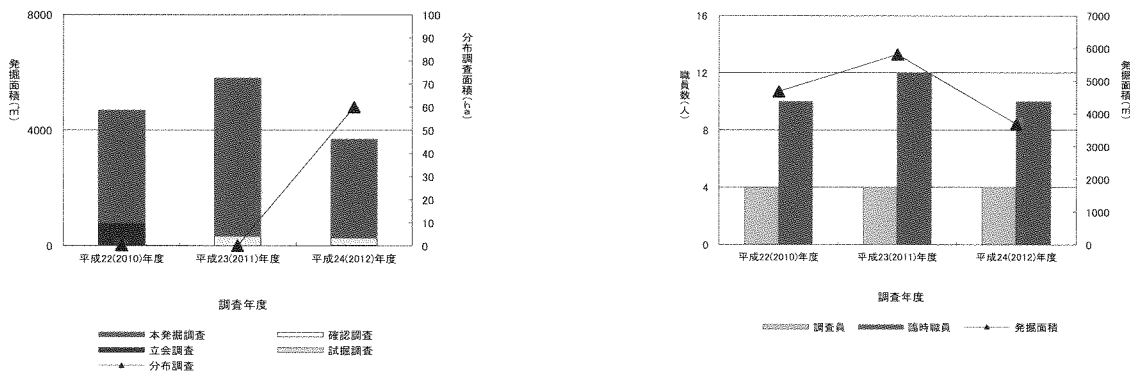
主な発掘調査は、経営体育成基盤整備事業による阿万本庄地区、湊里地区での本発掘調査、新田地区の確認調査、民間事業1件を実施しており、これまで同様に圃場整備事業に伴う調査の割合が非常に高いのが特徴となっている。

特筆すべき調査成果としては、湊里地区で調査した平石遺跡は縄文前期～室町の複合遺跡で、市内でも数少ない縄文時代後期の遺構や様々な時代の建物が確認された。

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							調査員	臨時
平成22(2010)年度	0.354	746.5	0	10.0	3,933.5	4,690.0	4	10
平成23(2011)年度	0	0	0	339.3	5,471.4	5,810.7	4	12
平成24(2012)年度	60.0	0	28.0	256.0	3,406.7	3,690.7	4	10

*単位:分布調査(ha)調査面積(㎡)臨時の職員数はその年度ののべ人数

調査量と職員数の推移 1



調査量と職員数の推移 2

普及啓発活動として、平成25年1月～4月にかけて『発掘調査速報展—平成23年度調査』を市内4会場で巡回して開催した他、西淡公民館（現湊市民交流センター）ロビーにてミニ展示を行い、展示品を年3回入れ替えた。刊行物は上記速報展のパフレット、『南あわじ市埋蔵文化財調査年報VI』の発行を行った。また、5月にトライやるウィークで三原中学校3名・南淡中学校2名・沼島中学校1名の生徒が遺物洗浄などの整理作業や市内の遺跡めぐり、測量作業、ミニ展示の入れ替えなどを行った。夏休み期間中には、小学生対象のわんぱく塾において、市内4会場で勾玉作りを行い、兵庫県立考古博物館や兵庫県立人と自然の博物館へのバスツアーも行った。



トライやるでの展示作業の様子



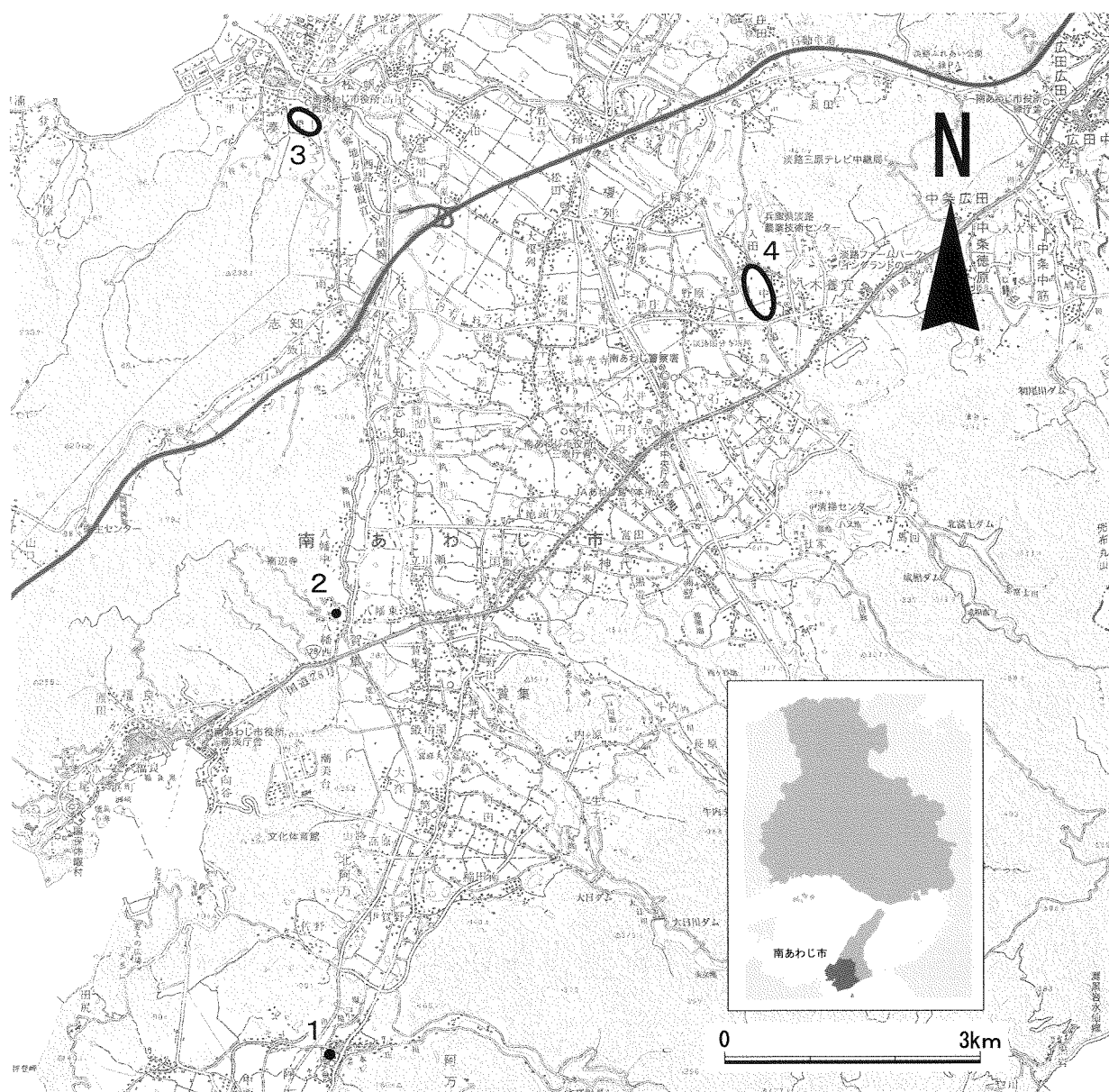
バスツアーにて解説を聞く様子

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図

No.	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
1	経営体育成基盤整備事業 (阿万本庄地区)	本発掘	360㎡	山崎	井手田遺跡	阿万	上町	H24. 6. 11~ 7. 11	弥生時代中期~中世の遺構・遺物確認
	経営体育成基盤整備事業 (新田地区)	確認	256㎡	坂口	有塚遺跡	北阿万	福田南	H24. 6. 18~ 10. 30	遺構未確認
2	布袋尊護国寺参拝者露天駐 車場造成事業	試掘	28㎡	坂口	護国寺東遺跡	賀集	八幡	H24. 10. 31 ~11. 1	中世の遺構・遺物確認
3	経営体育成基盤整備事業 (湊里地区)	本発掘	3046. 7㎡	的崎・定松・ 山崎・坂口	平石遺跡	湊	里	H24. 7. 2~ H25. 1. 30	縄文~室町時代の遺物・遺構確認
4	経営体育成基盤整備事業 (養宜地区)	分布	60ha	坂口	南畑遺跡・ 戒壇寺跡	八木	入田 養宜中 養宜上	H25. 1. 17~ 2. 26	縄文~室町時代の遺物を採集

調査一覧表

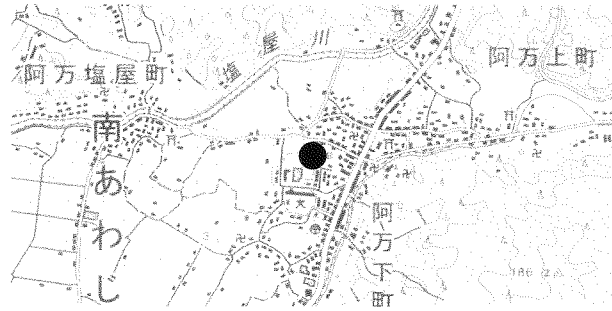


調査位置図

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1 井手田遺跡 — 5次調査 —

所在地 阿万上町字中田内
事業名 経営体育成基盤整備事業
担当者 山崎裕司
種別 本発掘調査
調査期間 平成24年6月11日～7月11日
調査面積 約360㎡



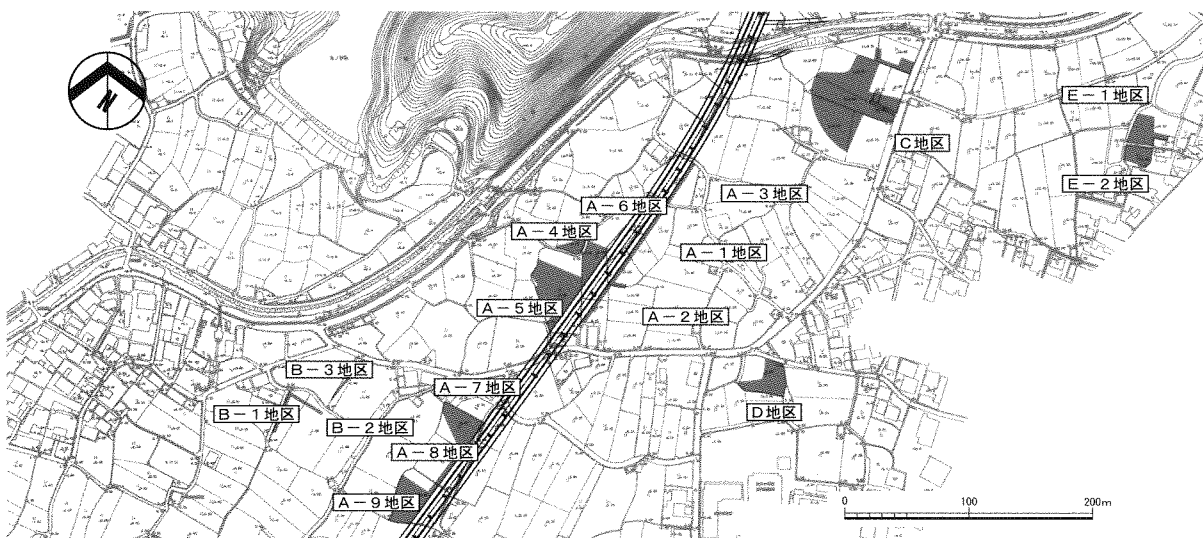
調査の位置

1 調査内容

当遺跡は南あわじ市の南端、本庄川によって形成された扇状地末端に位置する。標高は約7mで、北東から南西方向に緩やかに傾斜する。調査地の東方向約120mに亀岡八幡宮が鎮座し、中世に岩清水八幡宮領であった阿万庄の中心的な宗教施設と考えられる。周囲に神宮寺・万勝寺・慈眼寺など多くの寺院が分布し、神仏習合的な景観を良く残す。古老からの聞き取りによると、調査地周辺は近代まで鎮守の杜であったが、戦後の開拓で様変わりしたらしい。また調査地の東・南には道路が通っており、調査地南東端付近が四つ辻であったと言う。

平成16年度の当事業に伴う分布調査により遺跡の存在が明らかになり、平成18年度には兵庫県教育委員会によって主要地方道洲本灘賀集線（阿万バイパス）道路改良事業に伴う確認・本発掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになった。平成20年度に当事業に伴う確認調査（1次調査）を行い、その結果に基づき、平成21～23年度の本発掘調査（A～C・E地区）に引き続いて当地区（D地区）の調査を行うことになった。D地区では、中世と古代の遺構面を検出した。

中世遺構面では調査地南東側で柱穴と思われる遺構を検出し、柱列を構成する。遺構20は掘り方を検出できなかったが、遺構面上で重ねられた土師器小皿1～4および青磁碗5が横向きに立った状態で出土した。



調査区設定図

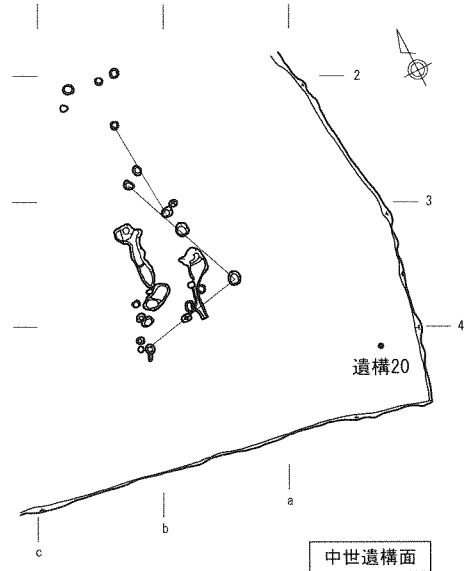
古代遺構面では調査区南東側を中心に土坑が検出されており、包含層からは須恵質・土師質の瓦が多量に出土している。平瓦7・9には大きな格子状のタキギが施され、8・10は布目が認められる。また弥生時代中期末の甕6も出土している。

2 まとめ

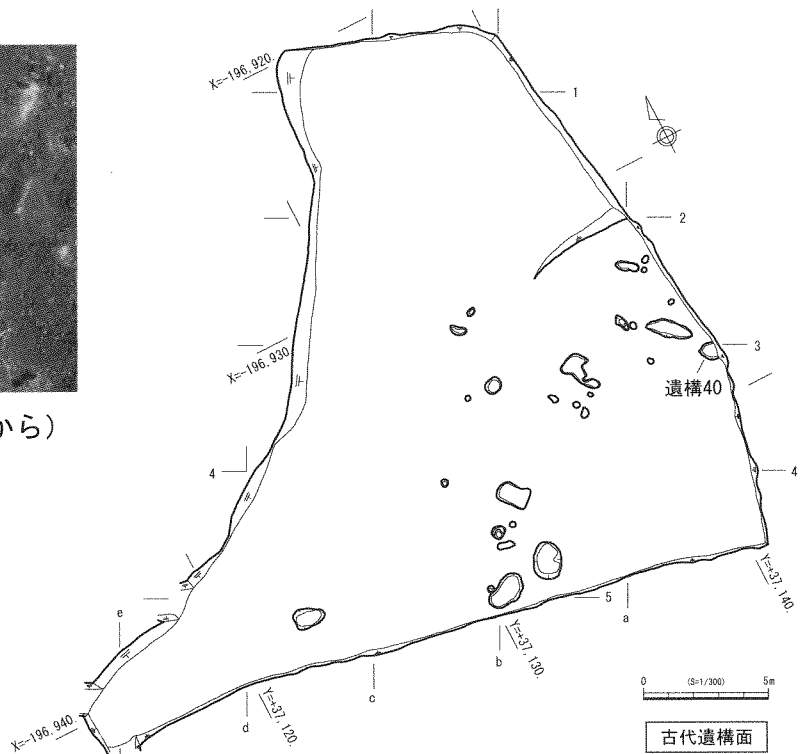
中世遺構面の遺構20は祭祀関係の遺構と思われる。調査区周辺がかつて鎮守の杜であったこと、あるいは四つ辻に隣接する場所であることが、祭祀の性格と密接に関係すると推定される。

古代の瓦片はこれまでの調査でも出土しているが、今回の出土量は極めて多い。調査区内では瓦と関係する遺構は検出されなかったが、調査区の東方向に瓦葺の建物が存在した可能性が高い。先にも述べたように周辺には寺社が多く分布し、その存在が明らかになるのは中世以降であるが、古代に遡る寺院が存在した可能性が高い。

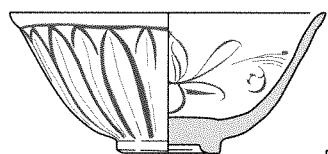
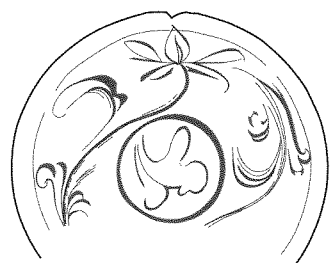
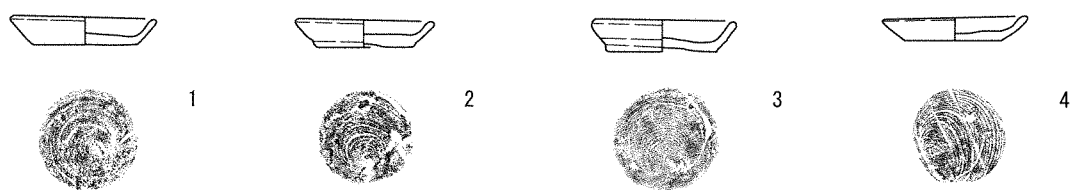
弥生時代中期末の甕も残りが良く、近隣に集落等が存在したと推定される。
(山崎)



遺構 20 遺物出土状況(北西から)



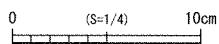
D地区 平面図



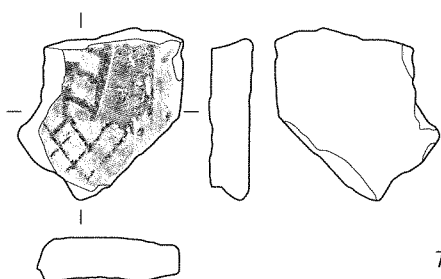
5



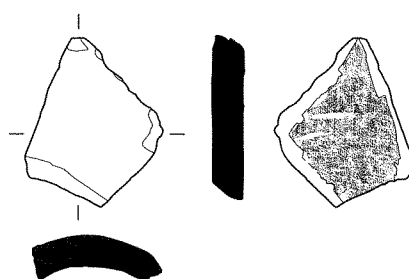
6



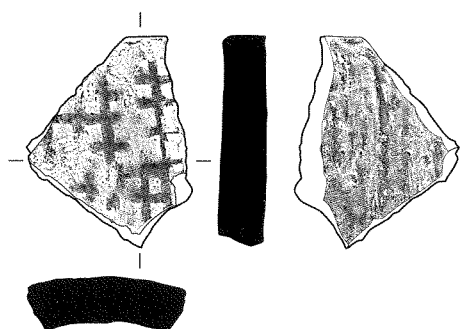
1~5 遺構20
6~10 包含層



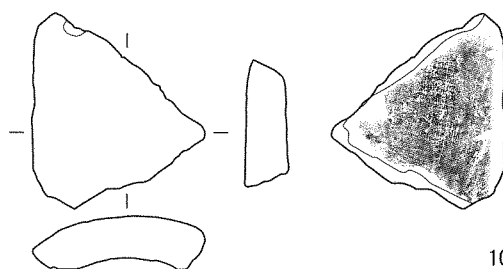
7



8



9

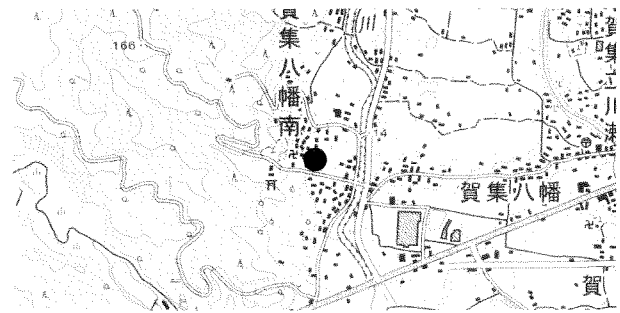


10

D地区 出土遺物

2 護国寺東遺跡 - 3次調査 -

所在地 賀集八幡字北ノ内
事業名 布袋尊護国寺参拝者露天駐車場
造成事業
担当者 坂口弘貢
種別 試掘調査
調査期間 平成24年10月31日～11月1日
調査面積 28㎡(2×2m7ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

本調査は、賀集八幡にある護国寺の東側で計画されている駐車場造成事業に伴う試掘調査である。

調査地は、三原平野南西部の南辺寺山山裾にあり、標高約22.30～25.50mを測る西から東方向に傾斜する水田などからなる。周辺には西側に隣接して護国寺(平安時代～江戸時代)や北側には護国寺東遺跡などが分布する。

調査は2×2mの調査区を7ヶ所設定して重機・人力併用で進めていった。以下概要を記す。

No.1・2 調査地北西部に位置する。No.1調査区では礫混褐灰色細砂質土(3層)～灰色土+礫混褐灰色細砂質土(5層)を中心に中世の遺物が出土した。No.2調査区では灰黄褐色粘極細砂質土(2層)・礫混褐灰色細砂質土(4層)を中心に中世の遺物が出土した。4層上面においても炭化物を含んだ遺構が壁面で認められることから、遺構面が4層上面と5層上面の2面になると思われる。遺物は土師器・須恵器・陶磁器・瓦がある。

No.3 調査地中央北寄りに位置する。礫混褐灰色細砂質土(3・4層)中心に中世の土師器・陶器が出土した。遺物の出土量はNo.1・2調査区よりも少なくなる。

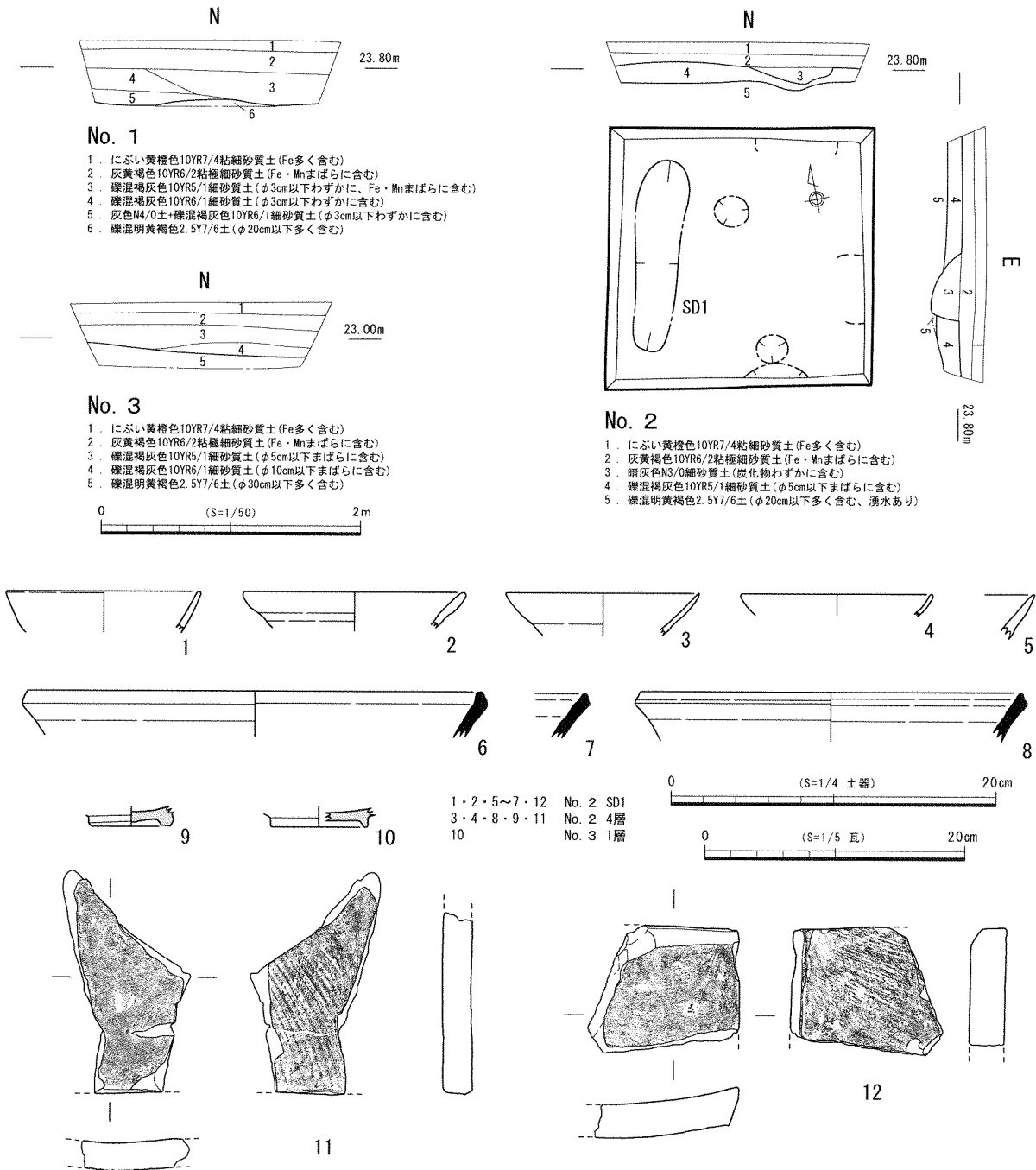


調査区設定図

No.4・6・7 調査地南部に位置する。いずれの調査区も約80cmの盛土がなされて現在の景観が形成されていることがわかった。盛土内から近世頃の遺物がわずかに出土したのみで、遺構・遺物包含層は確認できなかった。

2 まとめ

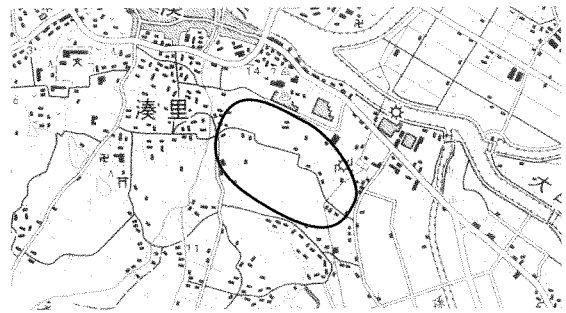
本調査により、調査地北西部を中心に中世の遺構や遺物包含層を確認した。遺物の出土状況などから調査地北西部 (No.1・2・3 周辺部) を遺跡範囲と判断した。また出土遺物の中には瓦が含まれることから西側に隣接する護国寺との関連が想定される。(坂口)



調査区平面図・層序図・出土遺物

3 ひらいし 平石遺跡 — 4次調査—

所在地 湊里字西外
 事業名 経営体育成基盤整備事業
 担当者 的崎薫・定松佳重・山崎裕司・坂口弘貢
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成24年7月2日～平成25年1月30日
 調査面積 3046.7m²



調査の位置

1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。標高は3.2～8.5mを測る。周辺には、遺跡が多く立地する。

平成21年度に実施した遺跡範囲確認調査では弥生時代～中世の遺構・遺物を広範囲で確認し、事業実施によって遺跡に影響の及ぶ範囲のみ本発掘調査を行った。

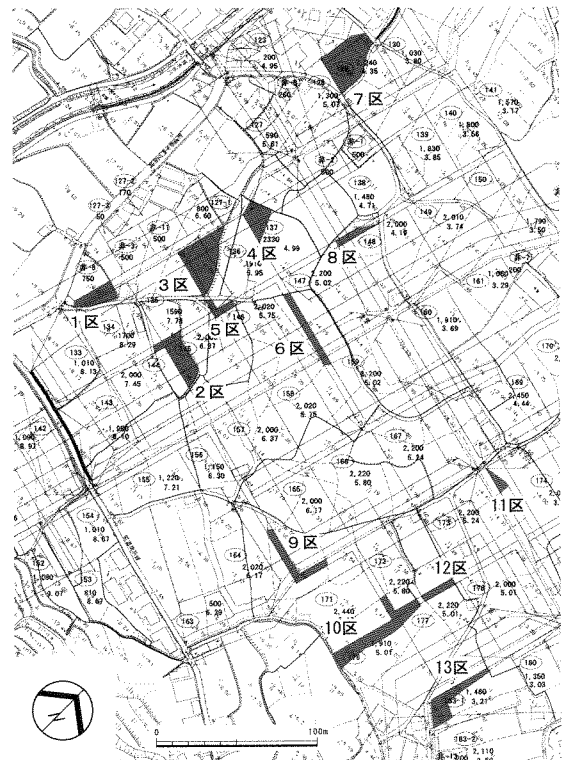
以下、主な調査区のみ記述する。

[2区]

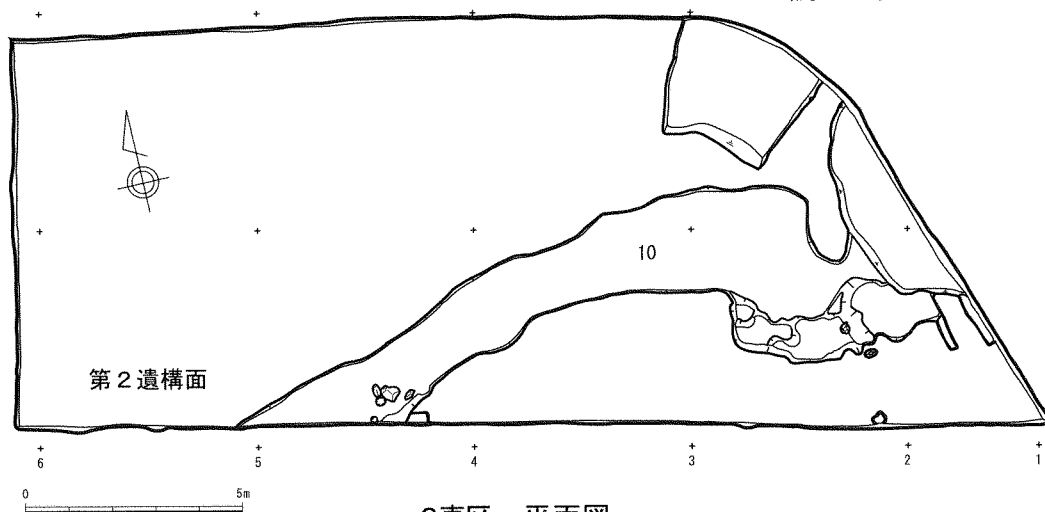
東西に分かれた圃場面と排水路の調査区である。

2東区では遺構面を2面確認した。第1遺構面では溝や土坑を検出し、遺構からは律令期の土師器や須恵器・製塩土器・瓦が出土した。

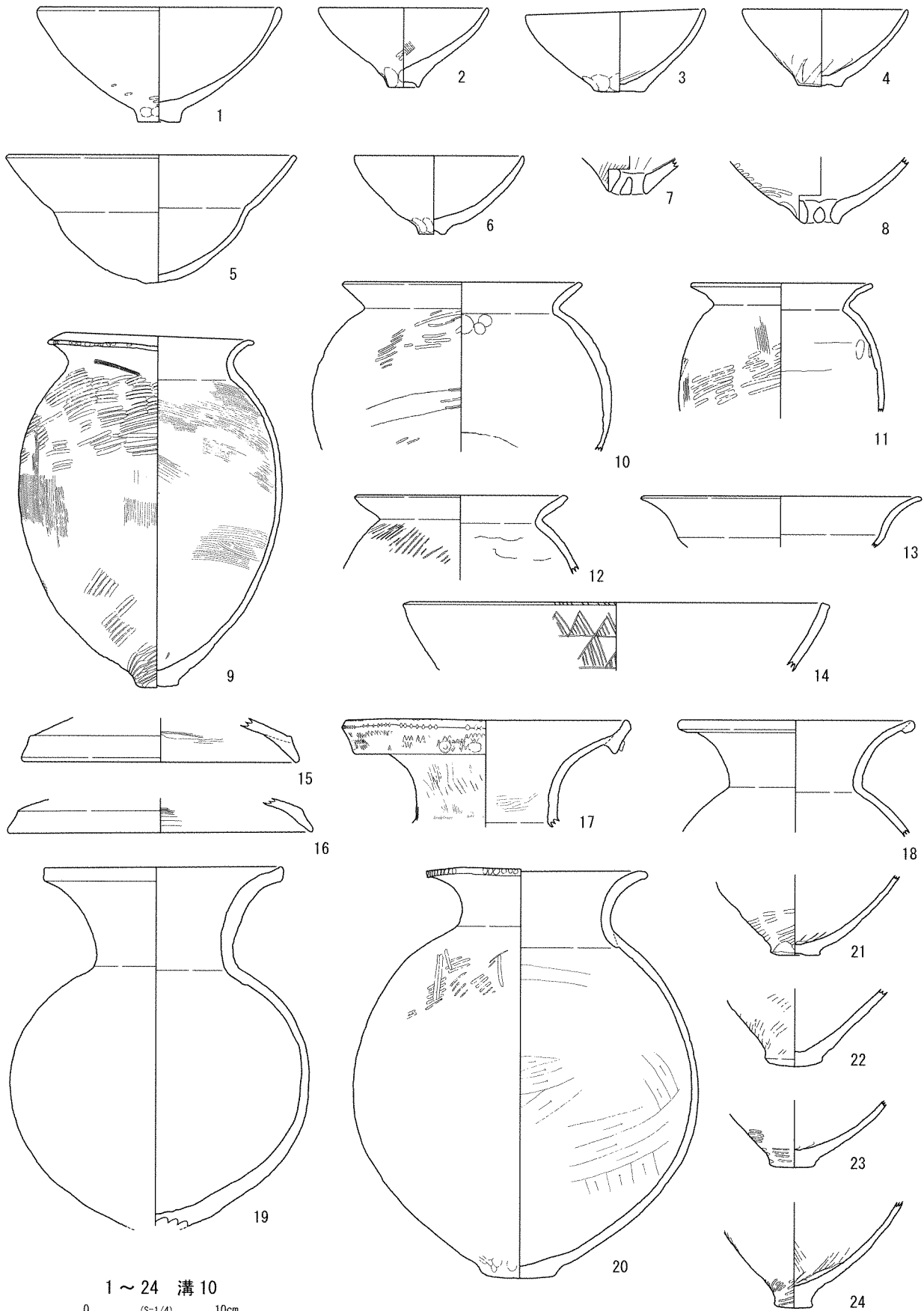
第2遺構面では南西から北東方向に走る幅1.3～3.8mの浅い溝10の東端で、弥生時代終末頃の土器1～24が大量に出土した。



調査区設定図



2東区 平面図



2区 出土遺物

[3区]

北から3-1～3区に分かれた圃場面と排水路の調査区である。西部では遺構面まで浅く、同一面で様々な時代の遺構を確認したが、3-2区南東部では遺構面を2面調査した。

第1遺構面では溝や土坑を確認した。遺物は土師器や須恵器・瓦器などの小片が出土し、平安時代末～鎌倉時代と思われる。

第2遺構面では縄文時代後期～鎌倉時代にかけての遺構を検出し、竪穴住居2棟・掘立柱建物12棟・溝・土坑などを確認した。

竪穴住居1 大きく削平を受けているが、周溝から判断すると楕円形の竪穴住居で、拡張を行っている。拡張前の住居を竪穴住居1A、拡張後の住居を竪穴住居1Bと呼称する。竪穴住居1Aは周溝から復元すると3.4～4.0mの規模で、中央土坑（土坑369）と2本柱（柱穴367・370）を持つ。遺物は小片の弥生土器が出土している。竪穴住居1Bは4.5～4.9mの規模で、4本柱の住居である。屋内土坑と考えられる土坑363は1Aと1Bのどちらに伴う遺構であったか判断できる要素はないが、弥生時代前期の甕97や石鏃125が出土している。

竪穴住居2 南北3.9×東西4.5mの方形竪穴住居である。明確な主柱穴は確認できなかった。遺物は縄文土器・弥生土器・サヌカイト片が出土しているが、時期は不明である。

建物1 桁行4（1間の柱間1.4m）×梁行2（1.9m）間の建物で、棟持柱は両柱ともほかの柱穴より浅く、窪み程度である。

建物2 桁行1（1.7m）以上×梁行1（1.9m）間以上の建物で、調査区の西側に続く。

建物3 2（1.3m）以上×1（1.8m）間以上の建物である。埋土が建物10・11と同じ暗灰黄色粘砂質土であり、上層から掘り込まれた遺構と考えられる。

建物4 竪穴住居2を切る桁行4（2.0m）×梁行3（1.5m）間の建物で、建物2と主軸が一致する。遺物は弥生土器片しか出土していないが、竪穴住居2と奈良時代の遺構を切って掘り込まれている。

建物5 桁行2（1.4m）以上×梁行1（2.6m）間以上の建物である。

建物6 桁行東側3（2.0・2.5m）・西側2（3.3m）×梁行北側1（4.1m）・南側2（1.8・2.3m）間の建物である。

建物7 桁行3（1.7～2.2m）×梁行2（1.8・2.0m）間の建物で、近接棟持柱である。

建物8 桁行4（0.9～1.1m）×梁行2（1.4m）間の建物である。桁行の1間の柱間が狭く、柱穴はやや小さい。

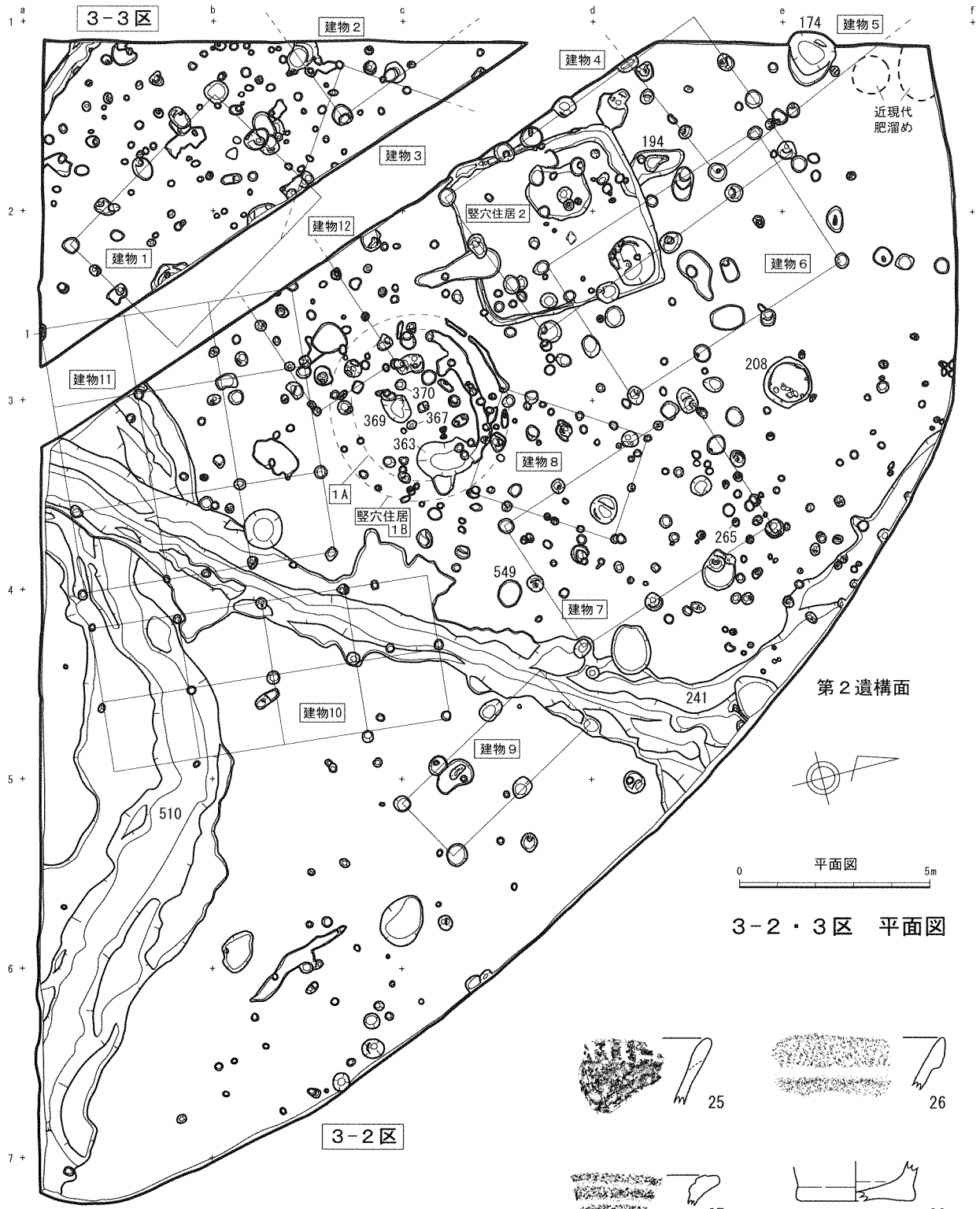
建物9 桁行東側2（2.5m）・西側3（1.4～2.0m）×梁行1（2.0m）間の建物である。柱穴から土師器と須恵器の小片が出土している。

建物10 桁行4（2.2・2.3m）×梁行2（1.9m）間の総柱建物である。柱穴から土師器・瓦器が出土している。

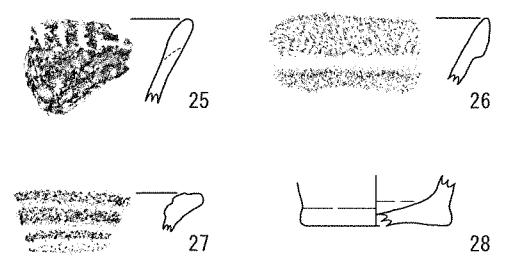
建物11 建物10の南側に主軸を同じくして建つ桁行3（2.1～2.7m）×梁行3（2.2・2.3m）間の総柱建物である。桁行中央の柱間が広い。土師器・瓦器・土師質の平瓦が出土し、平安時代末頃と思われる。出土遺物に瓦器が含まれるということから建物10と同時期とも考えられるが、建物間が1mと近接しているため、同時併存は困難と思われる。

建物12 桁行2（1.4m）以上×梁行2（1.2m）間で、建物6西側の桁行延長上に軸をそろえて建つ。

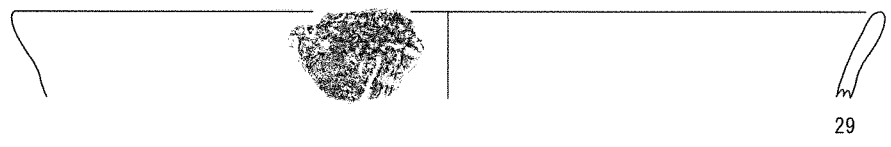
掘立柱建物は埋土と出土遺物から建物3・10・11が上層から掘り込まれた平安時代末～鎌倉時代の遺



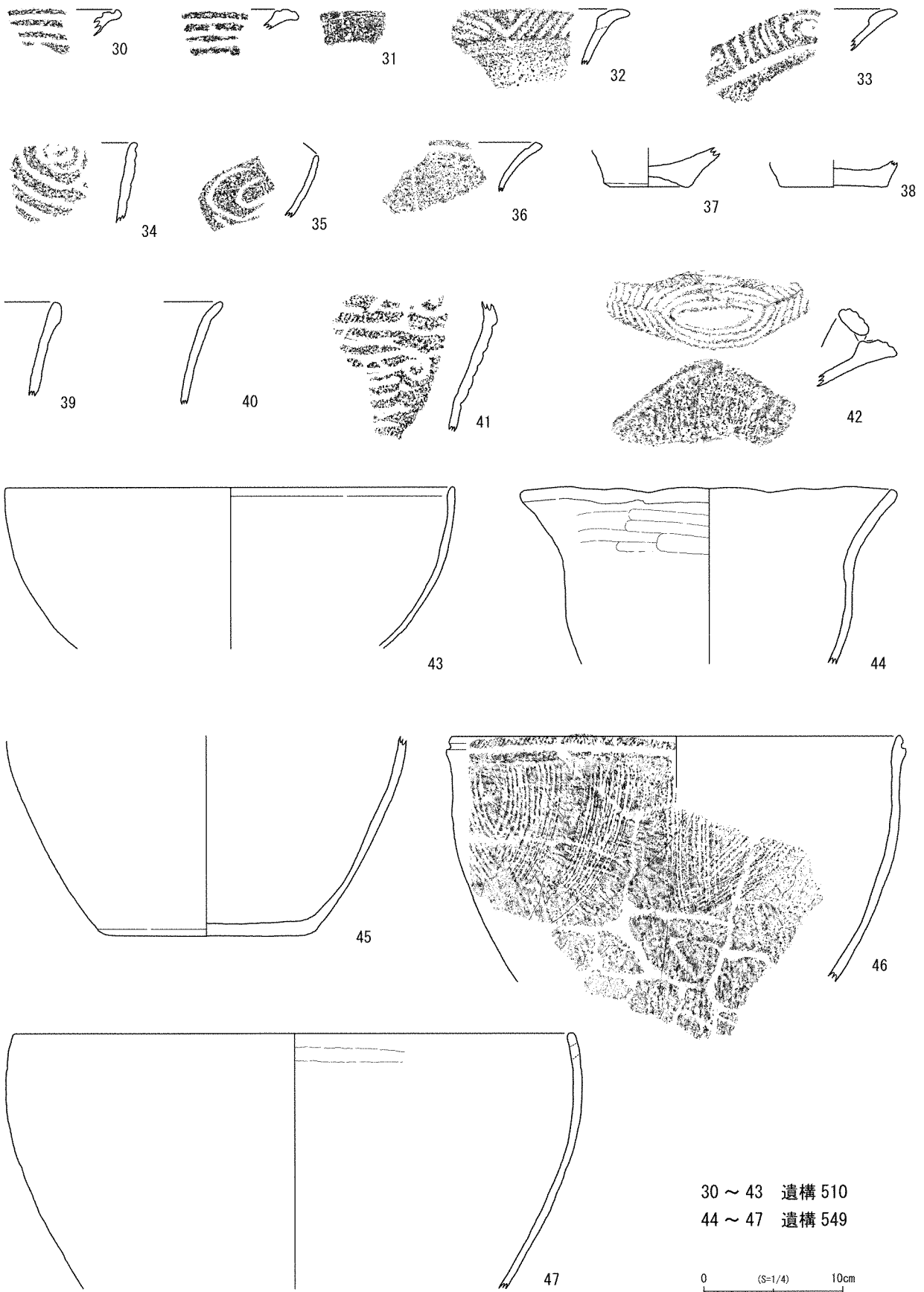
3-2・3区 平面図



25 ~ 29 土坑 208
0 (S=1/4) 10cm



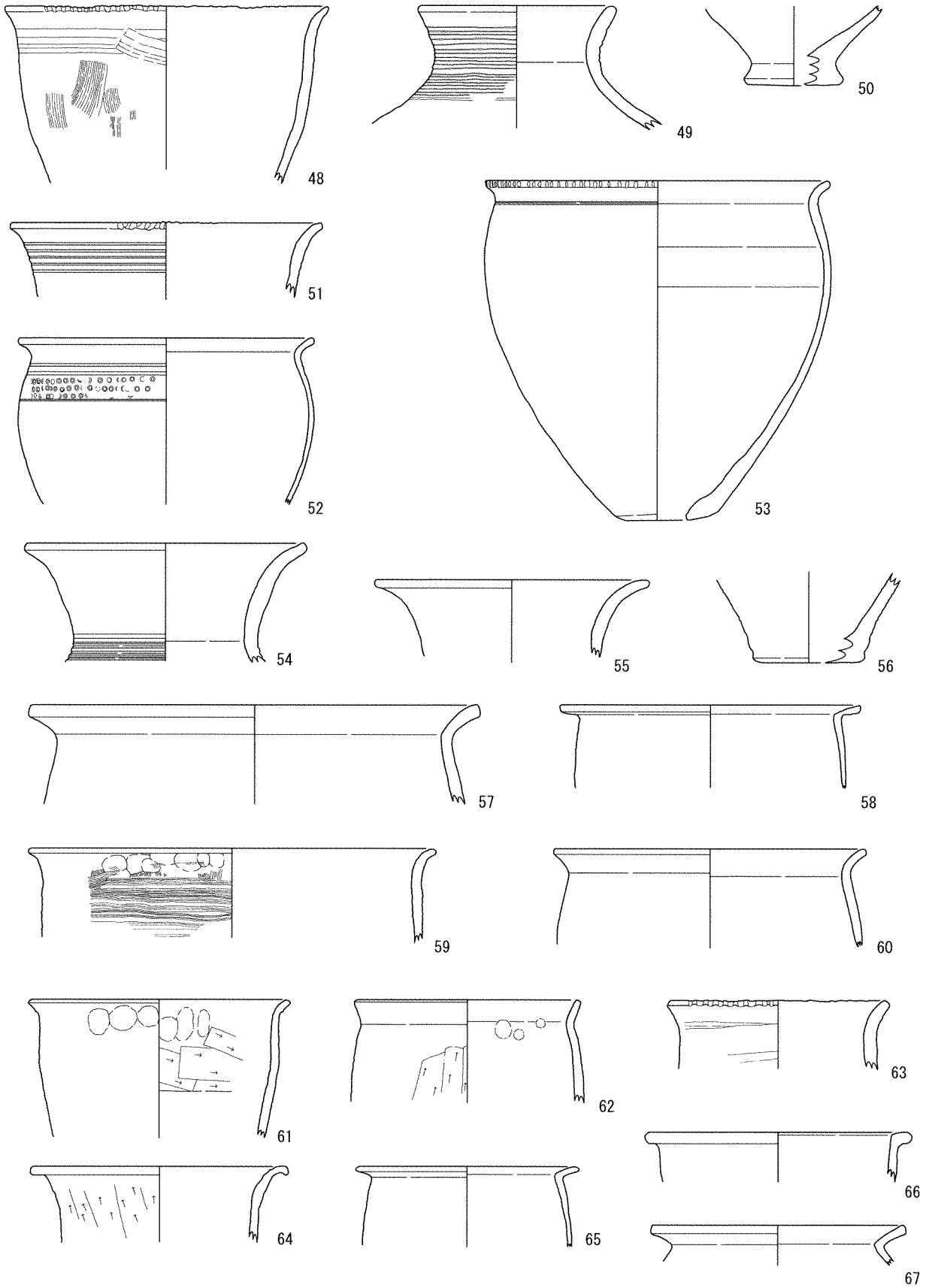
3区 出土遺物1 (縄文土器)



30 ~ 43 遺構 510
 44 ~ 47 遺構 549

0 (S=1/4) 10cm

3区 出土遺物2 (縄文土器)

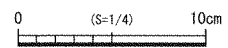


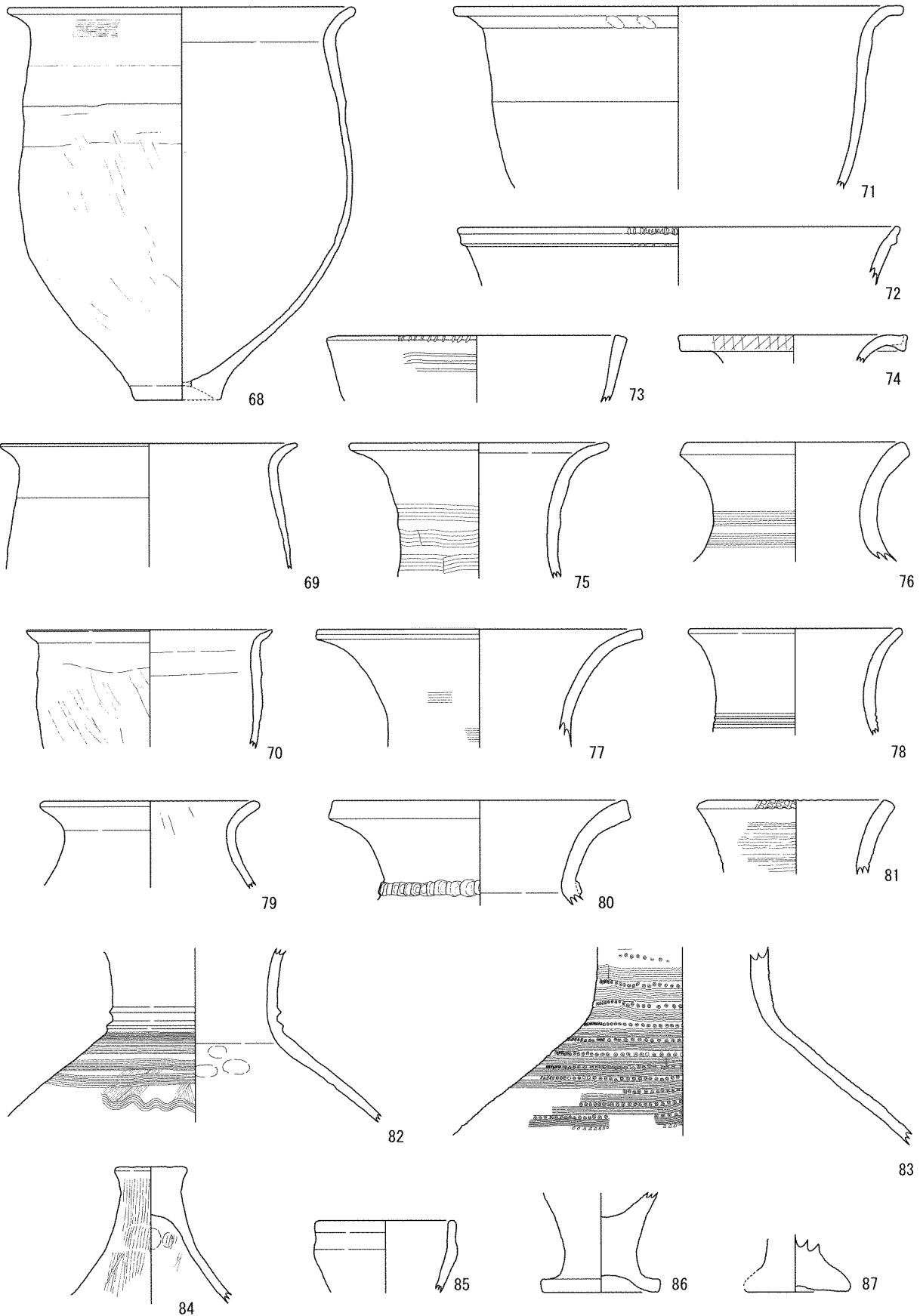
48 ~ 51 土坑 174

52 ~ 56 土坑 194

57 ~ 67 溝 241

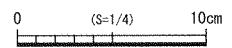
3区 出土遺物 3 (弥生土器)

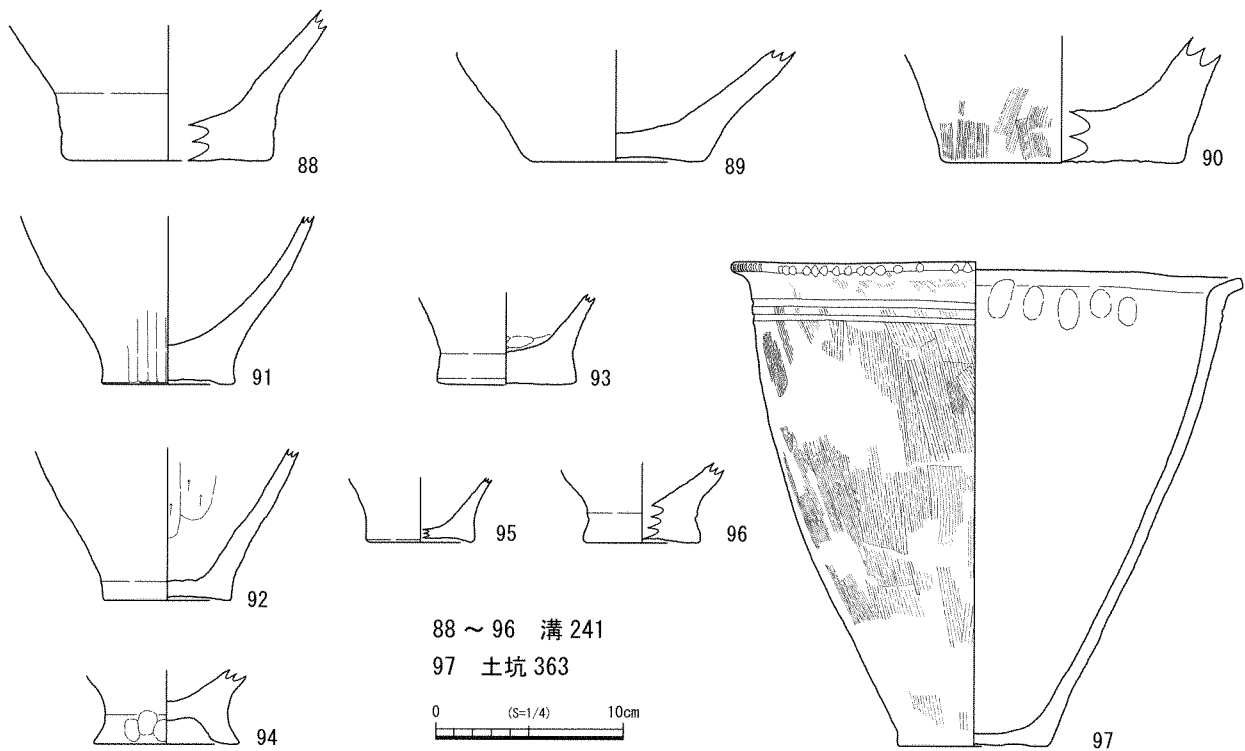




68 ~ 87 溝 241

3区 出土遺物 4 (弥生土器)



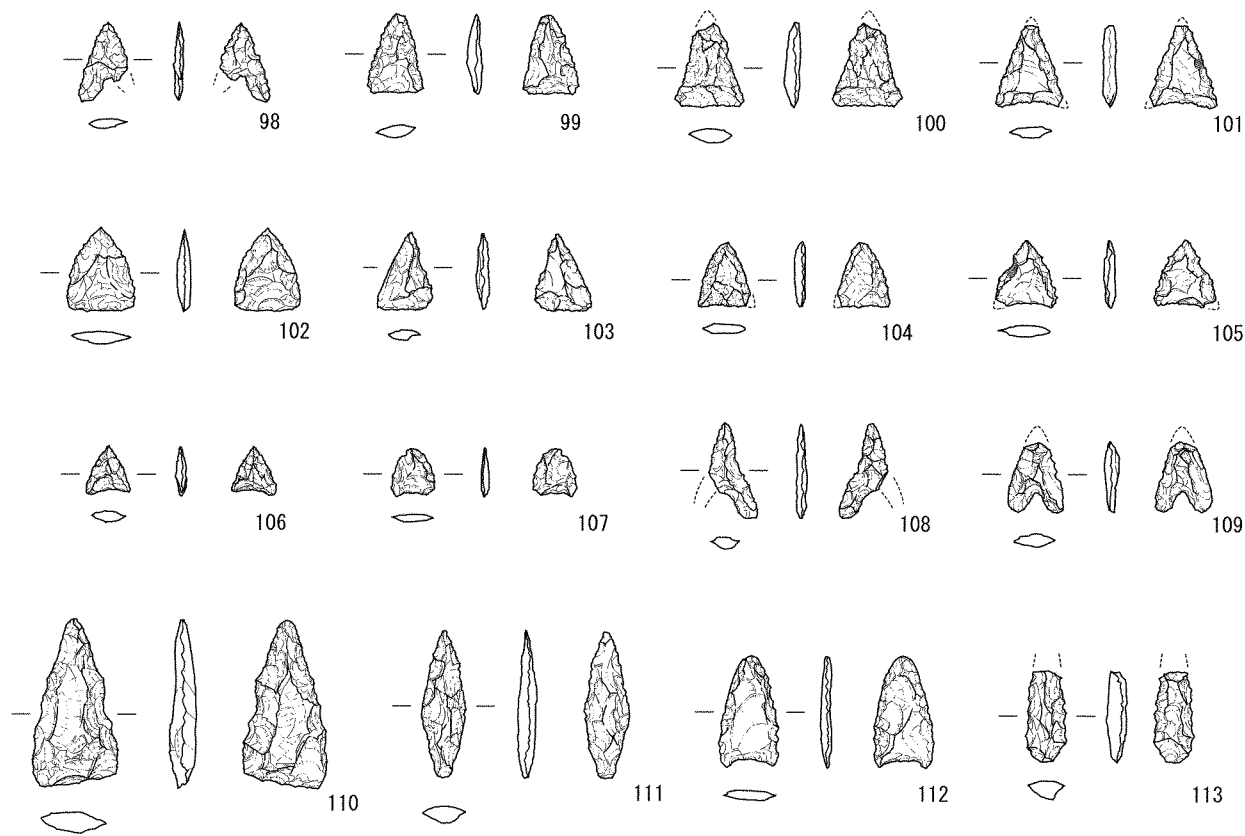


88 ~ 96 溝 241

97 土坑 363

0 (S=1/4) 10cm

3区 出土遺物5 (弥生土器)

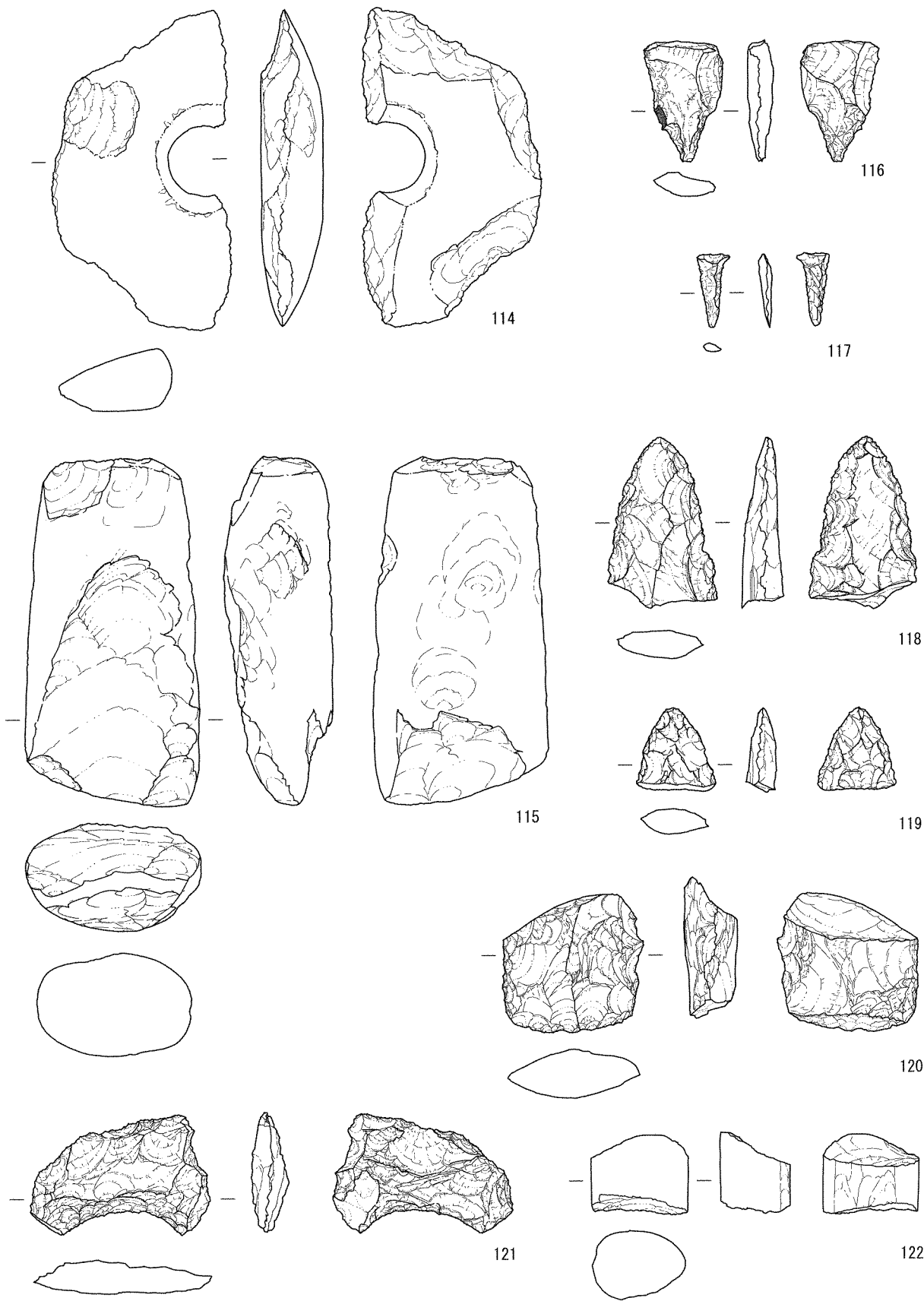


98 土坑 174

99 ~ 113 溝 241

3区 出土遺物6 (石器)

0 (S=1/2) 5cm



114 ~ 122 溝 241

3区 出土遺物 7 (石器)

0 (S-1/2) 5cm

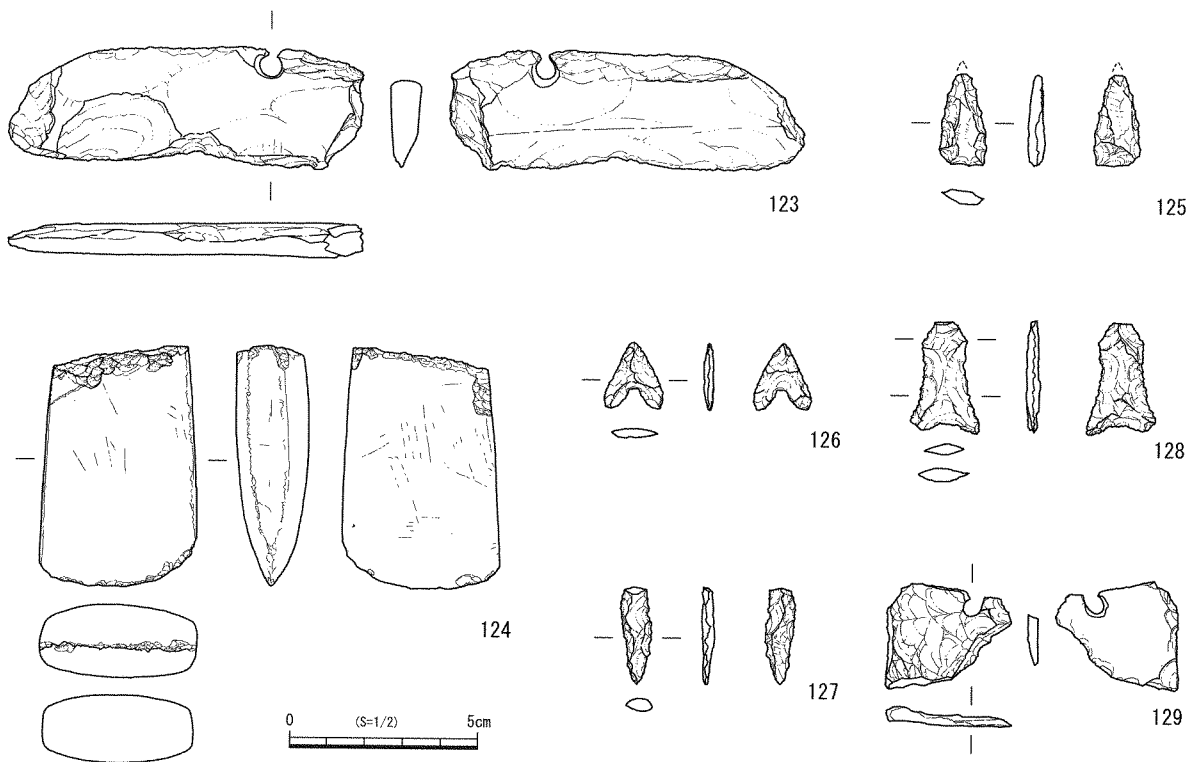
構と考えられる。そのほかの建物は、小片遺物しか柱穴から出土していないため時代は明確ではないが、奈良時代の遺構の上から掘り込まれた建物4と主軸が同じである建物2は奈良～平安時代を想定している。主軸を南北にとるやや大きい建物である建物1・5～7・9も同じ時代頃に建て替えを行った可能性が考えられる。桁行の1間の柱間が狭い建物8は、弥生時代の溝241と平行して建っていることもあり、弥生時代の建物と推測される。

土坑174・194 弥生時代前期～中期の遺構である。土坑174は直径1.2～1.4m、深さ0.3mの遺構で、中層に遺物が多く含まれ、48～51・98が出土した。土坑194は長さ1.2m以上、幅0.7m、深さ0.25mの遺構で竪穴住居2に切られる。52～56の遺物が出土した。

土坑208・549 縄文時代後期の遺構である。土坑208は直径1.2m、深さ0.4mの遺構で25～29が出土した。土坑549は浅く窪んだ遺構で、大型の土器44～47が重なった状態で出土した。

溝241 幅2.0m前後で深さ約0.4mの北東方向に走る溝で、遺構510を切っている。調査区の北東端で北西方向にL字状に曲がっているが、非常に浅いため、本流はそのまま北東方向に続くと考えられる。溝の中央部に遺物が多く含まれ、縄文時代後期・弥生時代前期～中期の土器57～96や石鏃99～113・石斧114・115・石錐116・117・石槍118～120・スクレイパー121・石棒122・石包丁123・擦石などの石器類やサヌカイト片が出土している。土器の中には播磨地域や結晶片岩を多く含む紀伊地域の土器68～71・96が含まれ、他地域との交流がうかがえる。

溝510 調査区の南部中央から弧を描いて南東部に流れる幅2.0～4.5m、深さ1.0mの自然流路である。縄文時代後期の縁帯文土器30～43や石鏃126・石錐127などの石器が含まれる。



123 溝 241 124 遺構 265 125 土坑 363 126・127 溝 510 128・129 包含層

3区 出土遺物8(石器)

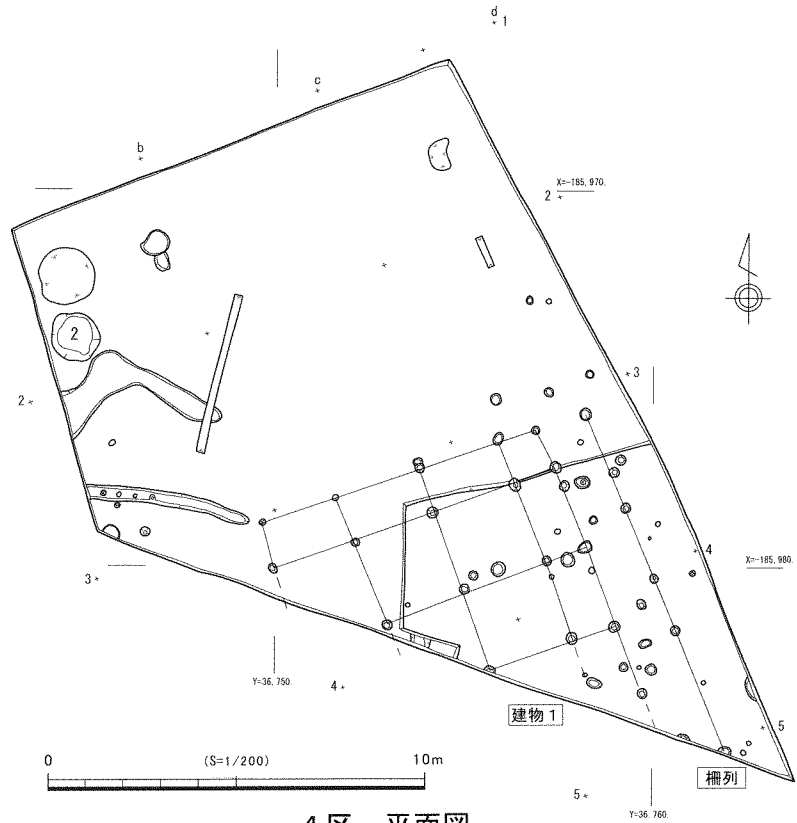
[4区]

圃場面の調査区で、西方からのびる丘陵と東方に広がる平野部との地形の傾斜変換点にあたり、ベースが東方向に降下する。^a 掘立柱建物、塀、土坑、溝、小穴などの遺構を確認した。

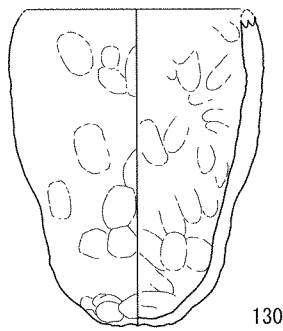
中世の遺構には、掘立柱建物、塀がある。建物1は、調査区南東部に位置する総柱の掘立柱建物で南側にのびる。規模は母屋部分が南北3間(6.4m)以上、東西3間(6.8m)、北側と東側に庇、さらに東側には塀又は柵列を有する。柱穴などからは土師器・瓦器が出土しており、中世前半と考えられる。

古代の遺構には土坑、溝があ

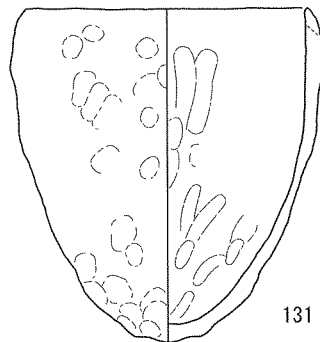
る。土坑2は直径約1.4m、深さ18cmの円形の土坑で製塩土器130・131や須恵器132・133に混じって焼土や炭化物が含まれる。焼塩作業の工程で使用された遺構と思われる。製塩土器は、器壁がやや厚めの特徴があり、奈良時代後半と思われる。



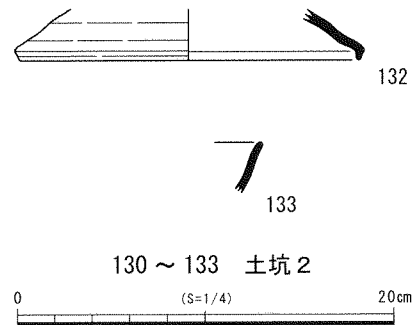
4区 平面図



130



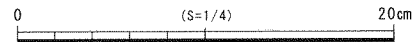
131



132

133

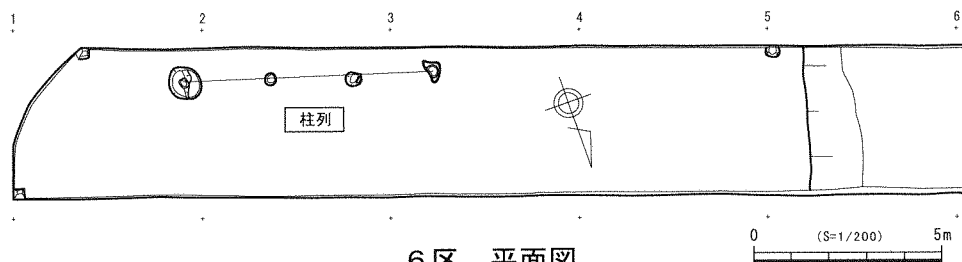
130 ~ 133 土坑 2



4区 出土遺物

[6区]

調査区東部の包含層から奈良～平安時代の遺物が出土しており、3間分の柱列が検出された。

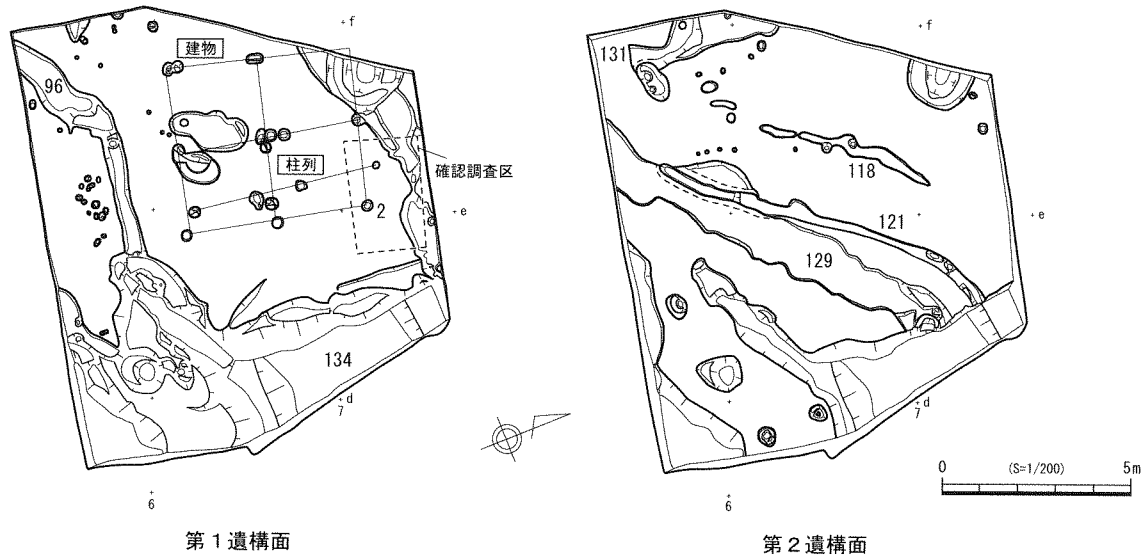


6区 平面図

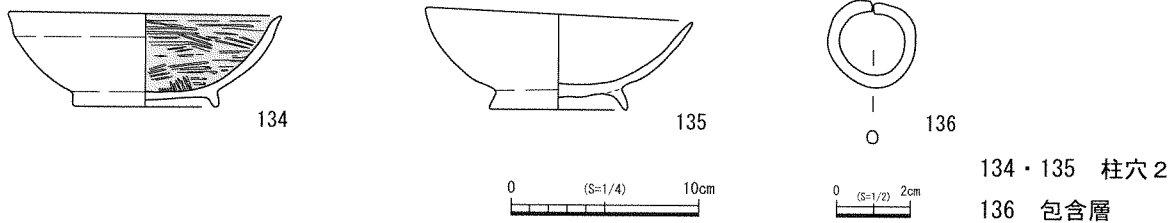
[7区]

7南区と7北区に分けて調査を行い、7北区を中心に遺構が検出された。

7北区では2面の遺構面を確認した。第1遺構面は平安～鎌倉時代の遺構面である。復元された掘立柱建物は南北2間以上、東西2間以上の総柱建物で、建物を構成する柱穴2からは平安時代後半の黒色土器碗134と土師器碗135が出土している。また建物以外に2間分の柱列が復元できた。第1遺構面直上から、流れ込みと思われる古墳時代の耳環136が出土した。劣化が激しく、銅芯のみでメッキは残っていない。第2遺構面は弥生時代前期～奈良時代の遺構面で、南東側の土坑群は古墳時代後期～奈良時代頃、溝状遺構118・121・129・131は弥生時代前期頃と推定される。



7北区 平面図



7北区 出土遺物

[9区]

L字状の排水路の調査区で、遺構面を2面調査した。

第1遺構面は調査区の西半で、掘立柱建物2棟と柵列・土坑などを確認した。

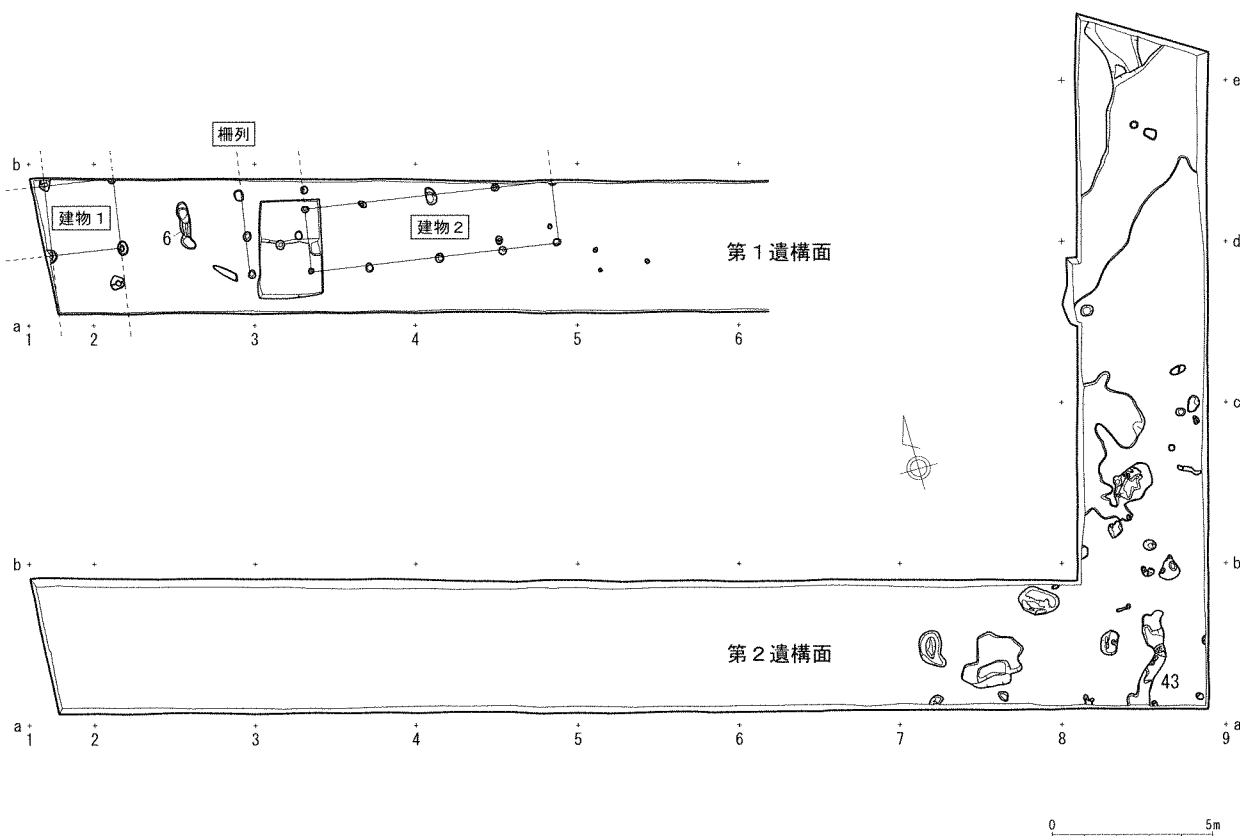
建物1 桁行1 (2.1m) 以上×梁行1 (2.1m) 間以上の建物で、東以外の調査区外へのびると推測される。柱穴から土師器・須恵器・瓦器・管状土錘が出土している。

建物2 建物1と主軸を同じくする建物で、規模は梁行4 (1.8・2.1m) ×桁行1 (1.9m) 間以上で、調査区の北側にのびる可能性が高い。柱穴から土師器・須恵器・瓦器・平瓦が出土している。建物の西側には、この建物に沿って柵列が並ぶ。

建物1と建物2の間にある遺構6からは土師器・瓦器・白磁碗の他に轆の羽口や焼けた石などが出土し、遺構には火を受けた痕跡がなかったことから、周辺で小規模な鍛冶作業を行っていた可能性が考えられる。出土遺物から第1遺構面の遺構は13世紀代と思われる。

第2遺構面は調査区の東半で地山をベースに検出をした。落ち込み状や窪みなど遺構と判別がつかないものが多い。溝43から弥生時代後期頃のタタキ甕片が出土している。

これらの遺構面以外にも断面観察から遺構面が複数あったことを確認しているが、第1遺構面のように建物を構成するようなまとまったものではない。



9区 平面図

[10区]

水路と圍場面の調査区である。ここでは掘立柱建物19棟、溝・土坑などを確認した。

遺構225 平安時代後半と思われる土師器皿が10枚出土した。

遺構232 緑釉陶器片が出土した。

溝583 調査対象地南にある張り出し部分に沿う形で西から東に流れる溝である。検出最大幅5.5m、最大深度1.2mを測る。ほぼ全層に弥生土器片と製塩土器片（脚台Ⅲ式）を含むが、断面や出土遺物から埋没には大きく3回の画期が見られることがわかった。第1画期の上層（137～140）は黑色土器・瓦器を含み、ほぼ完形の滑石製剣形模造品138が出土した。長さ73mm、最大幅18.3mm、最大厚6.3mm、重さ10.3g

を測る。その形態から4世紀末葉頃のものと思われる。第2画期の中層(141~148)は須恵器を含み、9世紀と思われる。第3画期の下層(149~159)は弥生時代後期末~古墳時代前期の土器が含まれ、東阿波型土器149・150や碧石製の管玉159が出土した。礫を多く含むことから、水流が速かったことがわかる。東西中央付近の北側肩部から出土した東阿波型土器や布留式土器が第3画期の終わり頃と思われる。現在も調査区南端には水路があり、この溝遺構の名残と考えられる。

井戸587 掘り方の直径90cm、井戸部分の直径46cm、深さ53cmを測る。土師器・瓦器・白磁が出土し、12世紀初頭に廃棄されたようである。現在でも湧水が著しい。

建物1 桁行2(1.1・2.2m)×梁行1(2.2m)間を測る。

建物2 桁行2(1.3m)×梁行1(2.0m)間を測る。

建物3 2(1.5m)間×不明。柱穴から瓦器片が出土した。

建物4 上屋は桁行4(1.3~1.8m)×梁行2(2.0m)間を測り、北東南の3面に下屋を持つ。柱穴から瓦器のほかにもしくは馬と思われる歯や骨片が出土した。

建物5 桁行3(2.2~3.0m)×梁行1(2.2m)間以上を測る。柱穴から瓦器片が出土した。

建物6 桁行3(1.0・1.9m)×梁行1(2.3m)間を測る。柱穴370より青磁無文碗片・瓦器片が出土した。

建物7 桁行2(2.1m)×梁行1(2.4m)間を測る。

建物8 桁行2(2.2~2.9m)以上×梁行2(2.6m)間を測り、総柱建物の可能性がある。柱穴338・358・493は柱根が残る。柱穴から15世紀前半の備前焼すり鉢片が出土した。

建物9 桁行4(1.6~2.2m)間×不明。柱穴から瓦器片が出土した。柱穴が大きく変形しており、柱の抜取りが行われたようである。

建物10 桁行2(2.0~2.3m)×梁行2(2.0m)間を測り、総柱建物である。

建物11 桁行2(1.7m)×梁行3(1.3~1.9m)間を測る。西側の梁行は2間(1.6m)である。

建物12 桁行2(1.3~2.1m)×梁行1(2.7m)間を測る。

建物13 桁行2(1.6m)以上×梁行1(2.0m)間以上を測る。

建物14 桁行3(1.3~1.7m)×不明。柱穴70の埋土上層より玉縁の白磁碗がほぼ完形で、下層からは瓦器片が出土した。

建物15 桁行2(1.7m)×梁行1(2.1m)間を測る。柱穴186より青磁劃花文碗片が出土。

建物16 上屋は桁行3(2.2~2.6m)以上×梁行2(1.4~1.7m)間を測り、東に下屋を持つ。柱穴から瓦器片が出土した。建物17の建て替えと考えられる。

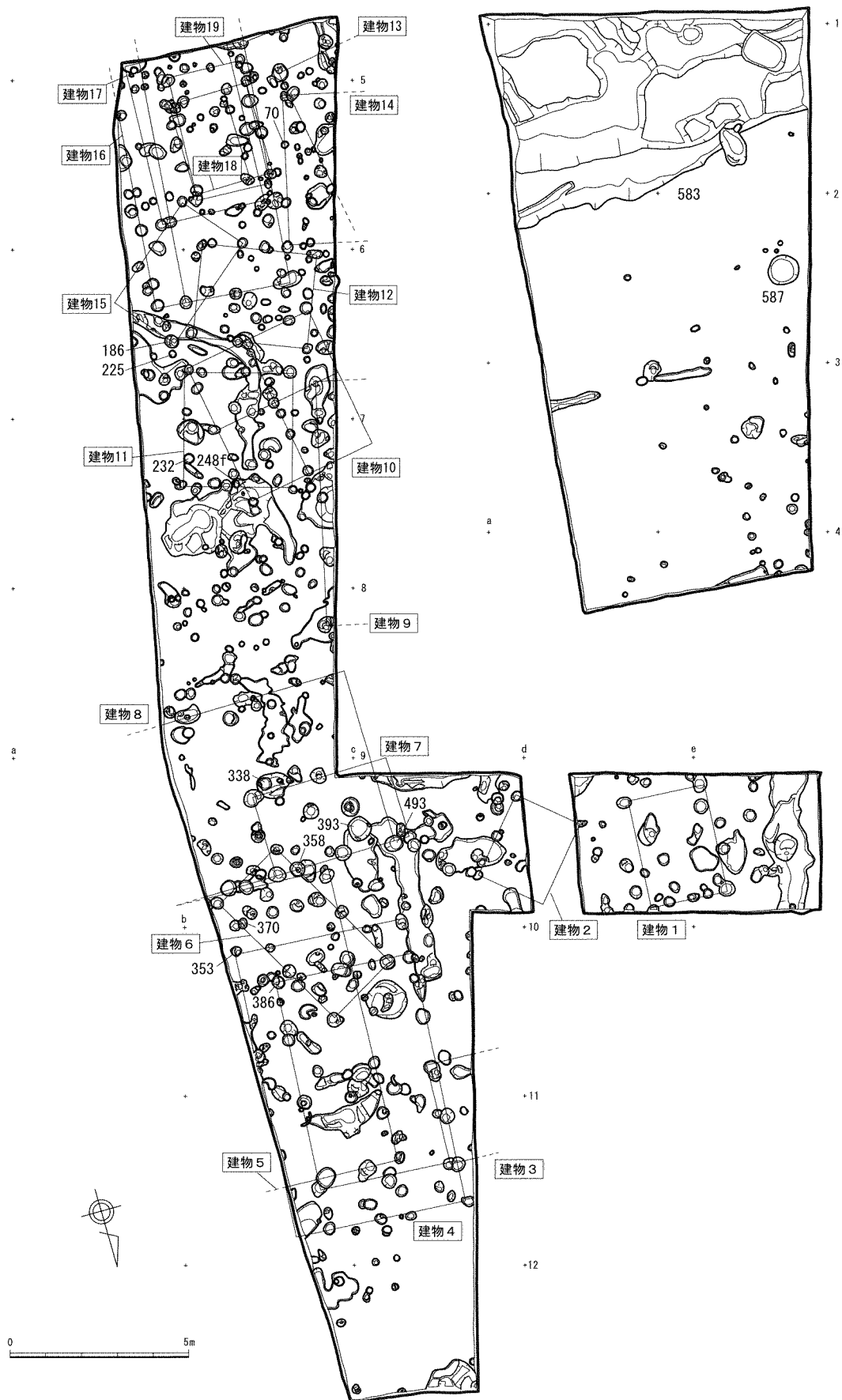
建物17 桁行2(2.3~2.5m)×梁行2(1.5m)間を測る。柱穴から瓦器片が出土した。

建物18 上屋は桁行2(1.3~1.5m)×梁行1(1.7m)間を測り、西に下屋を持つ。

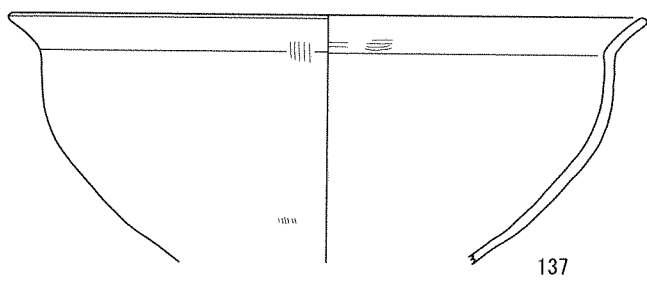
建物19 桁行2(1.3・2.4m)×梁行1(2.2m)間を測る。柱穴から瓦器片が出土した。

現段階において、建物の先行関係は、建物11→10・13→12(11世紀中頃)→9・14→3・19→5・17(12世紀前半)→1・4・16(12世紀後半)→6・15(13世紀)→8・18(15世紀前半)→7と考えられる。建物2は時代判別ができる遺物が無いため不明である。

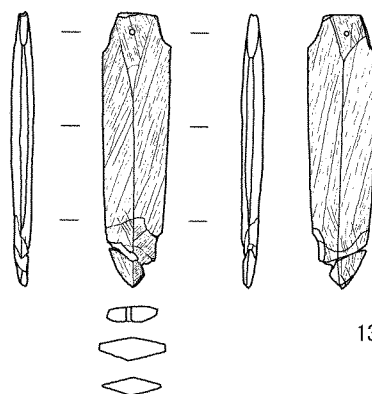
縄文時代の遺構ではないが、遺構248・338・353・386・393より縄文時代前期後半の土器である北白川下層式160~165が出土した。162・164にはC字型爪形文が施文されている。縄文時代前期の遺物が確認されたのは、平石遺跡の中でも10区北半だけであった。



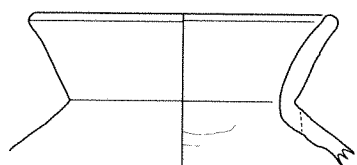
10区 平面図



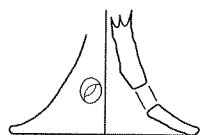
137



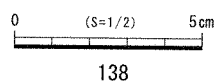
138



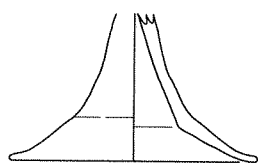
139



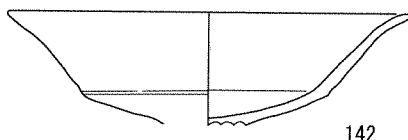
140



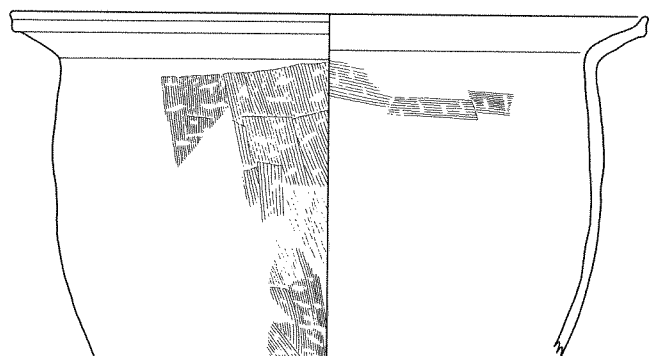
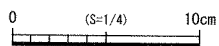
138



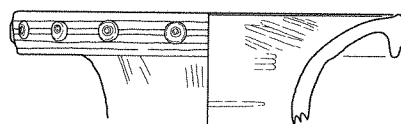
141



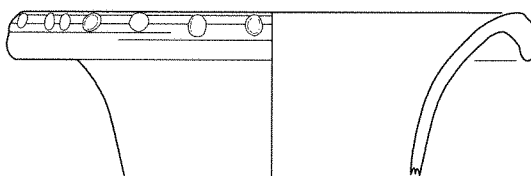
142



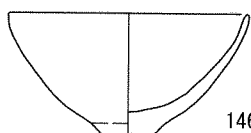
143



144



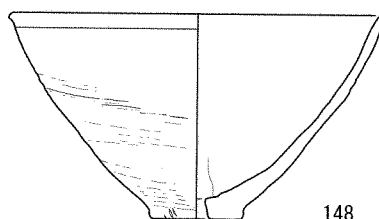
145



146



147

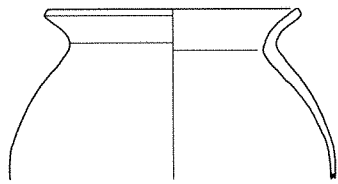
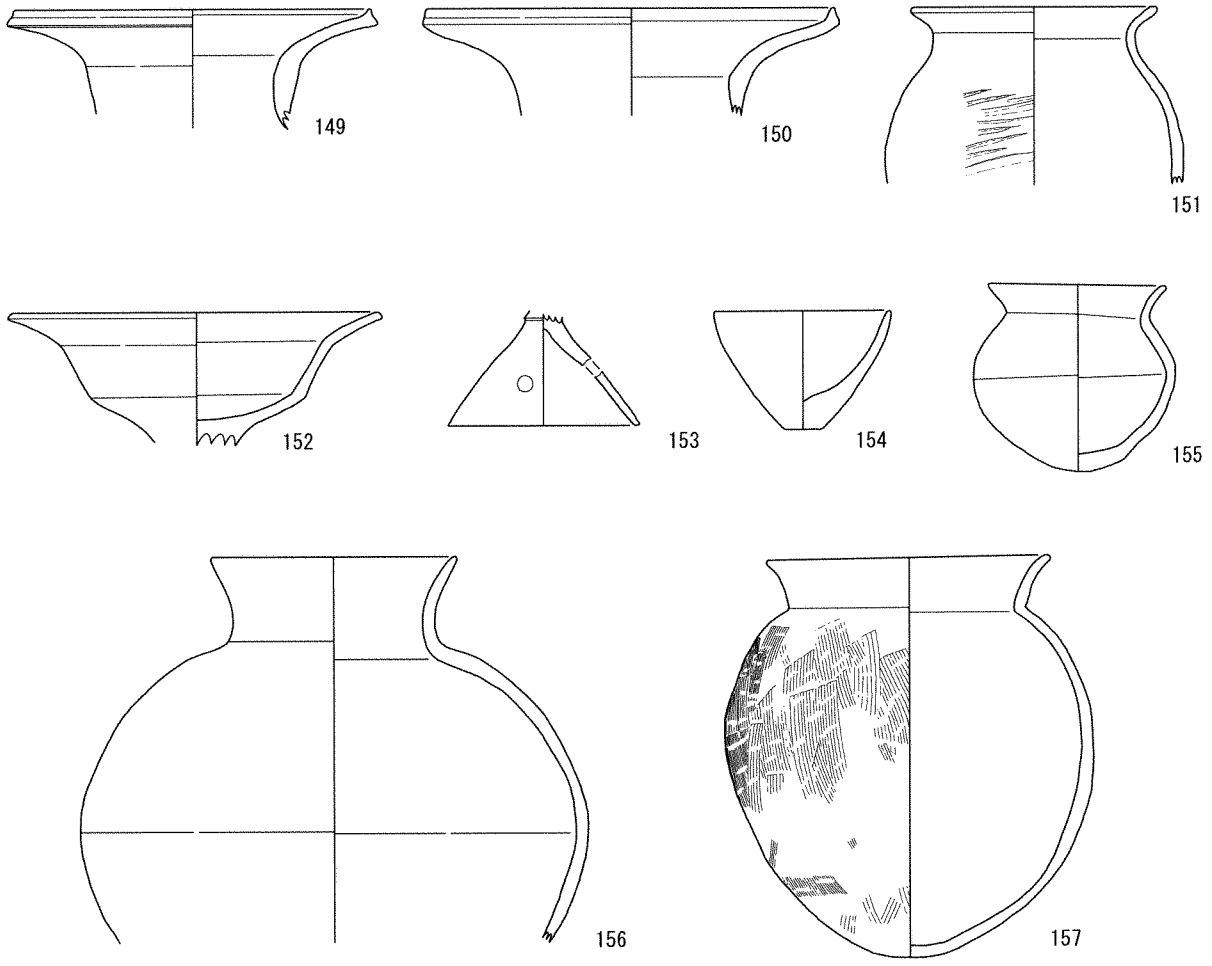


148

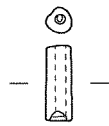
137 ~ 140 溝 583 上層

141 ~ 148 溝 583 中層

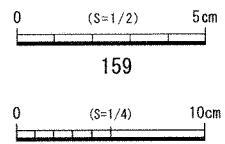
10区 出土遺物 1



158



159



149 ~ 159 溝 583 下層

160 · 161 遺構 248

162 柱穴 338 163 遺構 353

164 遺構 386 165 遺構 393



160



161



162



163



164

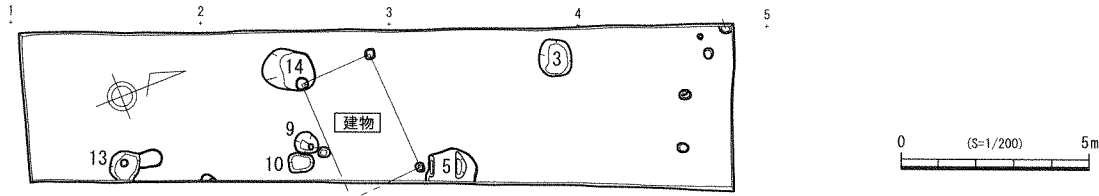


165

10区 出土遺物 2

[12区]

調査区南側では多量のサヌカイト片や石核が出土しており、周辺で石器製作を行ったと推定される。土坑3・5からもサヌカイト片が出土しており、弥生時代の遺構の可能性が高い。土坑9・10・13・14も埋土から同時期と推定される。調査区中央付近で南北1間、東西1間以上の掘立柱建物が復元できた。包含層の出土遺物から平安～鎌倉時代の可能性が高い。

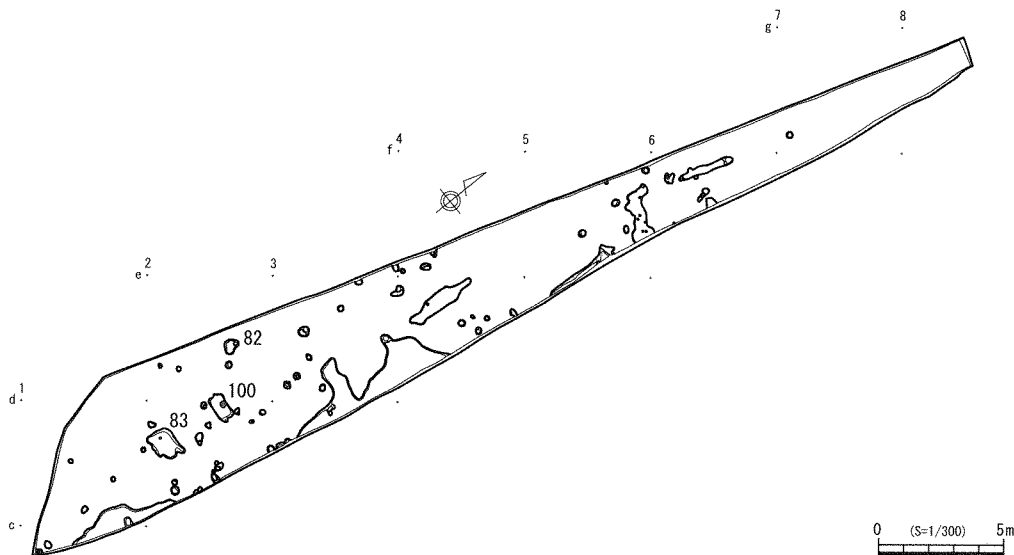


12区 平面図

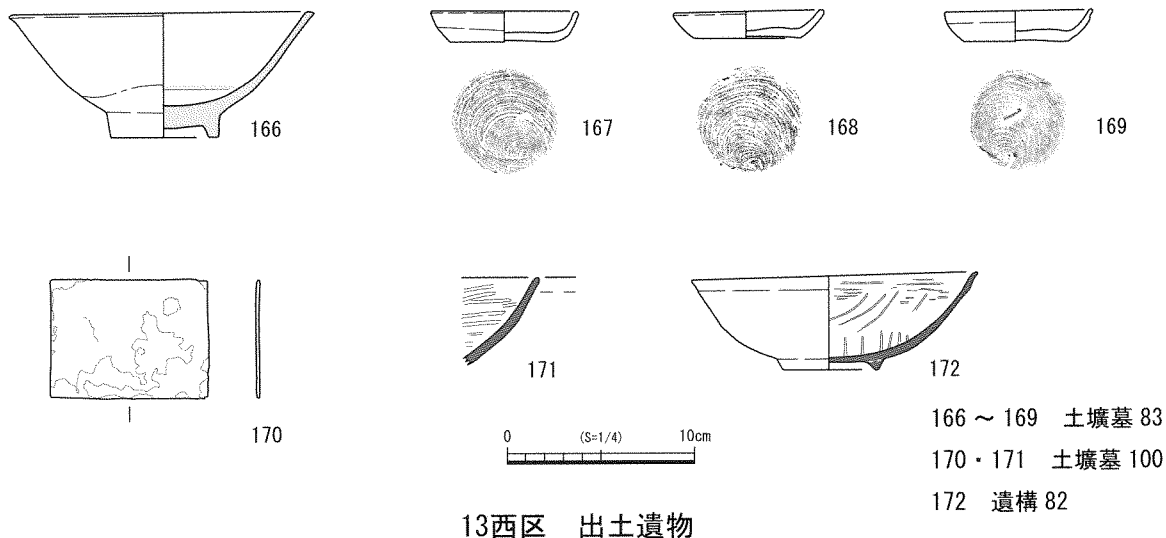
[13区]

13 東区と 13 西区に分けて調査を行った。

13 西区の南側からは鎌倉時代の遺構が検出された。土壙墓 83・100 は共に頭を西側にし、横向きに屈葬された状態で人骨が出土している。土壙墓 100 の中央付近からは大きな平たい石が出土しており、遺体埋葬後、大きな石を置く風習があったと推定される。頭蓋骨周辺から副葬品が出土しており、土壙墓 83 から白磁碗 166 と土師器小皿 167～169 等、土壙墓 100 からは 6.3×8.5cm の銅板 170 が出土している。また包含層からも骨片が多数出土していることから、周辺は 10 区の居住域に伴う墓域であった可能性が高いと考えられる。



13西区 平面図



2 まとめ

本遺跡は縄文時代前期～室町時代の遺跡であることがわかった。

確認調査で見つかっていなかった縄文時代前期の遺物を10区で、後期の遺物・遺構を3区で確認したことは、市内においてまだ遺跡数の少ない縄文時代を考えていく上で良好な資料となった。この周辺は、市内でも早い段階から人々の定住がはじまった地域と推測される。

弥生時代は3区で前期の竪穴住居を1棟確認し、溝241などに含まれる豊富な土器量から前期～中期にかけてある程度の規模の集落が存在していたと考えられる。3区の南部や東部には居住域が広がり、また、石包丁の出土から稲作農耕が営まれていたようである。今後、周辺で水田遺構が確認される可能性が高い。弥生時代終末～古墳時代初頭にかけては、2区溝10や10区溝583でまとまった土器の出土が見られるが、この時期の住居は確認できていない。また10区溝583にはこの時期の製塩土器が多く含まれていた。柿木谷川を隔てた里原田遺跡でも同時期の製塩土器が多く確認されていることから、当時の海岸線は現在よりも内陸にあり、この地域一帯で製塩作業が行われていたものと思われる。弥生時代前期～中期にかけては紀伊や播磨地域、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけては阿波地域のほかに讃岐地域・吉備地域の土器も出土していることから、海岸の近くに立地する平石遺跡は、他地域との海上交易が盛んであったと考えられる。

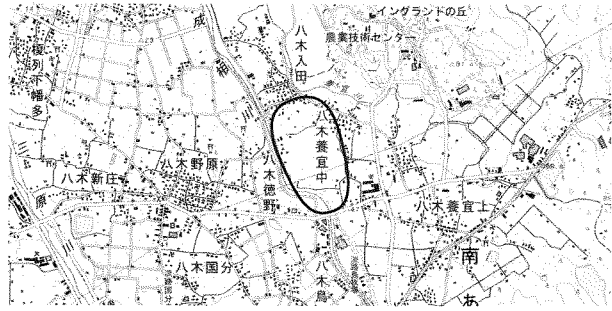
3・4・6・7・9・10・12区では奈良～鎌倉時代の掘立柱建物が多く見付き、規模の大きい建物も確認している。遺物に緑釉陶器や輸入陶磁器が見られることから、古代～中世にかけて公的な施設や有力者層が存在していたものと思われる。

湊地区は古代以降、淡路国の国津（港）として栄えてきた海上交通の要衝であり、南あわじ市だけではなく、淡路島全体の歴史を考える上で重要な地域である。今後もこの地域から古代の役所など重要な遺跡が発見される可能性が高い。

(的崎・定松・山崎・坂口)

4 ^{みなみはた}南畑遺跡・^{かいだんじ}戒壇寺跡

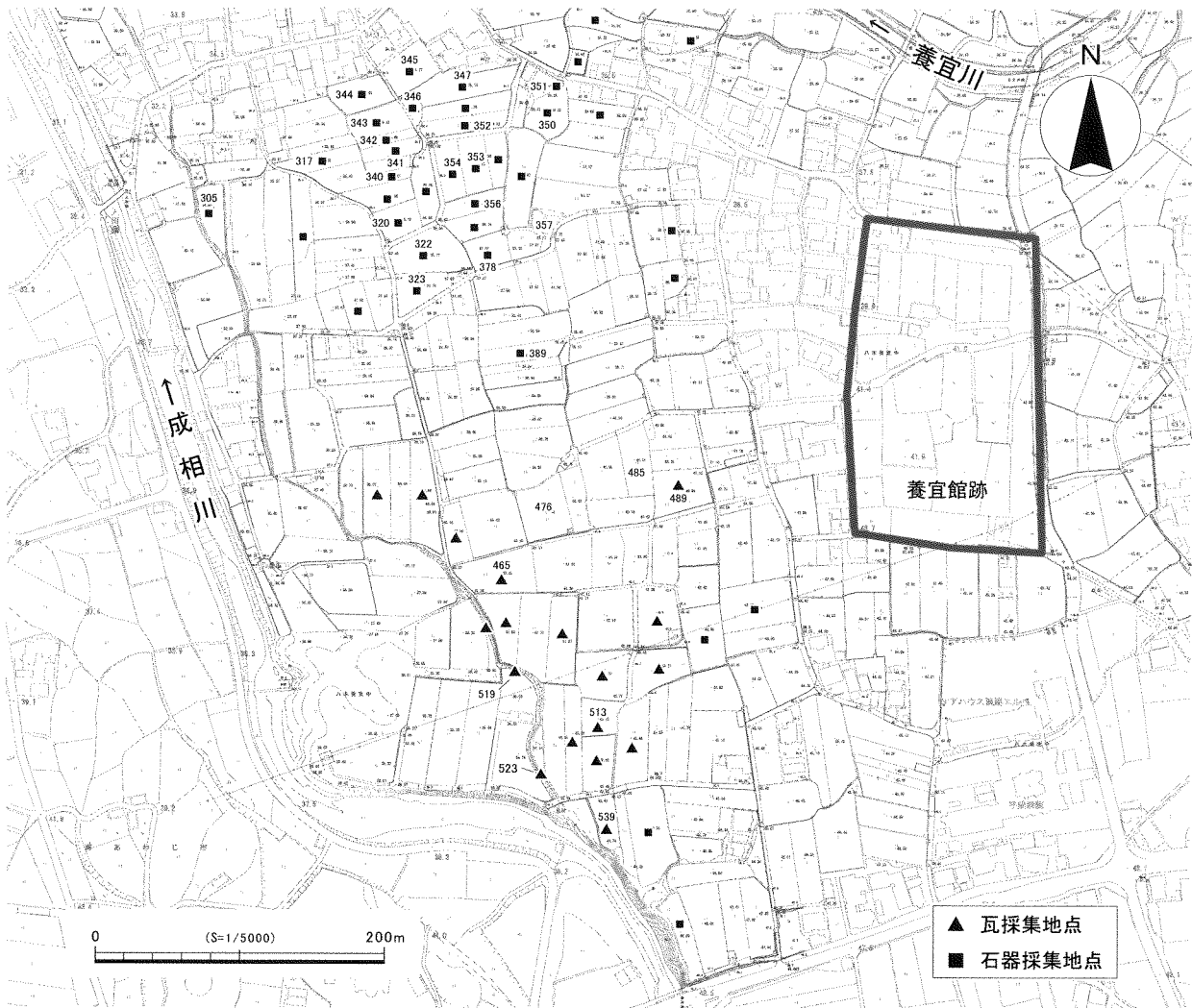
所在地 八木入田・養宜中
 事業名 経営体育成基盤整備事業（養宜地区）
 担当者 坂口弘貢
 種別 分布調査
 調査期間 平成25年1月17日～2月26日
 調査面積 約60ha



調査の位置

1 調査内容

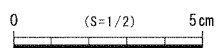
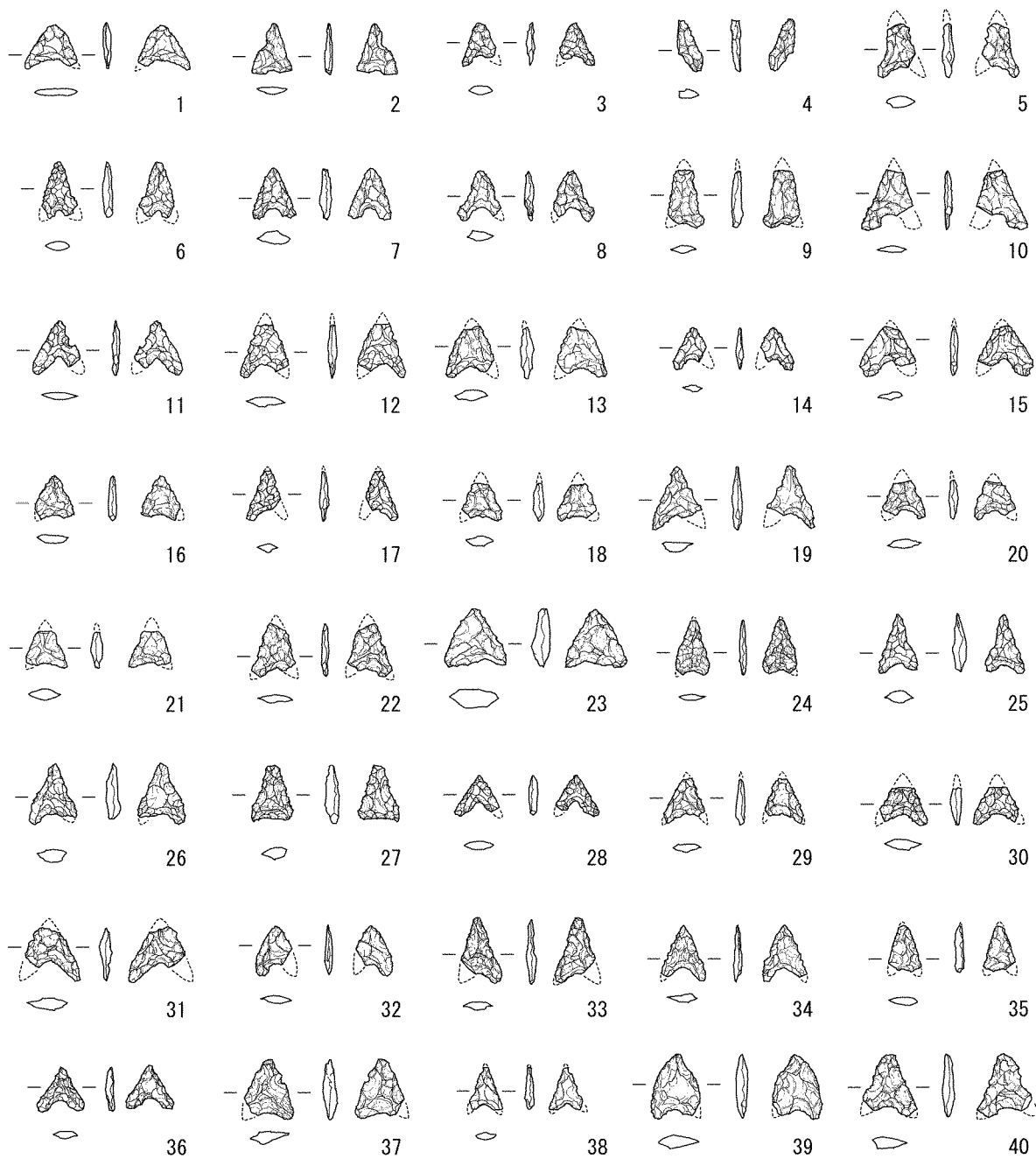
本調査は、八木養宜上・養宜中・入田地区で計画されている県営圃場整備事業に伴う分布調査である。調査地は、三原平野北東部の成相川右岸域、標高22～62mを測る水田などからなる。現在、養宜館跡の西から北西部が南畑遺跡、西から南西部が戒壇寺跡として遺跡登録されている。調査の結果、ほぼ全域で遺物が採集できており、特に成相川右岸域と養宜館跡に挟まれた先の両遺跡の範



遺物採集地点位置図

冪に多い傾向が認められる。採集遺物には須恵器、土師器、サヌカイト、石器、陶磁器、瓦などがあり、ここでは南畑遺跡と戒壇寺跡の採集遺物を紹介したい。

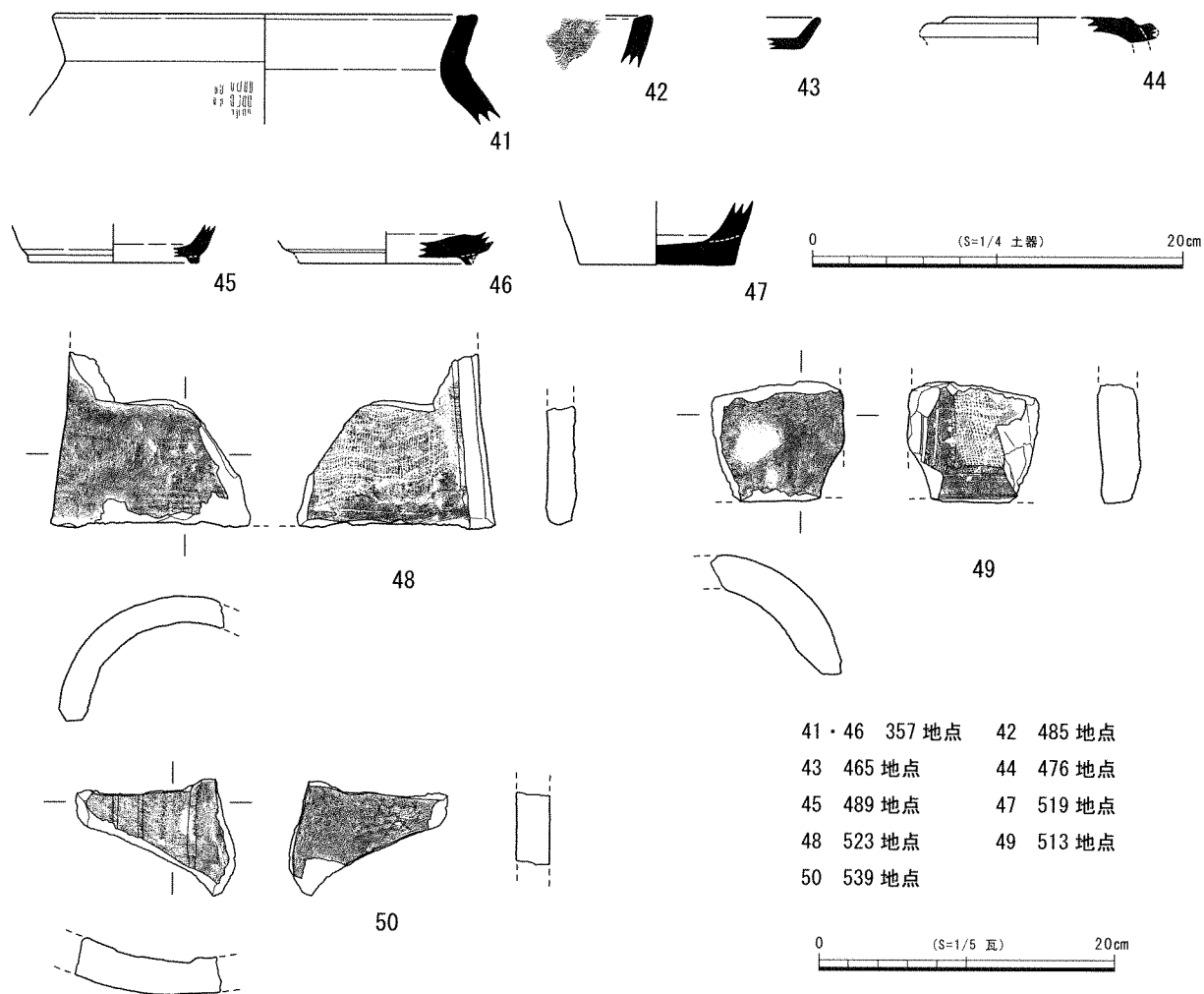
南畑遺跡については、これまで石器が大量に散布していることで知られており、今回の調査においてもサヌカイト製の打製石器を多く採集することができた。採集された石器は、小型の凹基式のものが多く、縄文時代に属するものが多いと思われる。



- | | | | | |
|------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1・2 305 地点 | 3・4 317 地点 | 5 322 地点 | 6 323 地点 | 7 340 地点 |
| 8・9 341 地点 | 10 342 地点 | 11～18 343 地点 | 19～21 344 地点 | 22・23 345 地点 |
| 24 346 地点 | 25～27 347 地点 | 28・29 350 地点 | 30・31 351 地点 | 32 352 地点 |
| 33 353 地点 | 34・35 354 地点 | 36～38 356 地点 | 39 378 地点 | 40 389 地点 |

南畑遺跡採集遺物

戒壇寺跡については、これまで採集資料として淡路国分寺跡と同範の軒瓦などが知られていたが、今回の調査において奈良～平安時代と思われる瓦や須恵器が散布することを再確認した。軒瓦は含まれないものの、分布量は比較的多く、分布範囲は約 200m 四方と広い。平成 22 年度に実施した下水道に伴う調査では瓦がまとまって出土していることから、周辺には奈良～平安時代の寺院跡が存在する可能性が非常に高い。



戒壇寺跡採集遺物

2 まとめ

本調査の結果、事業対象地内に遺物が散布することが確認することができた。特に南畑遺跡や戒壇寺跡周辺については、遺物量が多く注意を要する。(坂口)

2017年3月31日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報IX
2012年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100

TEL 0799-42-3849

印刷 淡路印刷株式会社

〒656-0121 兵庫県南あわじ市山添168-5

TEL 0799-45-1323